



たかのの車輪



なかのっ輪



「中野に関わる方々の、声を聞きたい。」
明治大学・山脇ゼミとして多文化共生を学ぶうち、
まちに関わる方の想いや考えを知りたくなりました。
ネット上にある意見や、データに乗っている数字ではなく、
“人と人”として出会い、話を聞いてみたいです。

今回私たちは、一人目の方から次の方を紹介してもらう
リレー形式でインタビューを行い、この冊子にまとめました。
まちに関わる方たちの繋がりを広げ、
みんなで大きな輪をつくりたいという願いを込めています。

この冊子には、47人の方々の中野への想いととも、
それぞれの方の人生が詰まっています。中野で学ぶ学生、
中野のまちに関わっている方、
ぜひページをめくって中野への旅へ出てみてください。
きっと、素敵な方々との出会いが待っています。

新しいものは お金をかければ作れるけど、 歴史はお金をかけても 作れないですよ。

2

016年9月15日、中野
駅南口のレンガ坂に麦酒

大学がオープンしました。前職の酒屋でビールの研究をしていた山本さんは、入れ方一つでビールの味わいが変わると発見し、多くのお客さんに美味しいビールを体感してほしいとお店を始めたそうです。そんな中、飲食店どうしの交流が活性化するイベントを作りたいと、「まちなかのバル」やマップ作りを始めます。

はじめはどのような雰囲気か、商店街にあったのでしょうか。

「前は、同じ時間に営業している他の飲食店さん同士は交流が難しかったです。イベントを運営する中で、商店会長や他の地域の人たちとつながり、変わったと思います。お互い挨拶するようになったり、仲良くなったと思いますよ。このレンガ坂もおしゃれな洋風のお店が増えて、女性のお客さんも増えました。麦酒大学は、中野のまちでどのような役割を持っているのでしょうか。」

「地域にいるお客さんを取り合うのではなく、中野の外からお客さん呼び込んで、「2件目でどここのお店どうですか?」と同じ商店街のお店を紹介したいですね。」

「お店同士のつながりができたとしても、新たな取り組みを始めるのは大変なはず。実現した秘密はなんだったのでしょうか。」

「中野のまちは寛容で、外からのものをあまり拒絶しないと思います。一緒に活動をしてきた人たちは、新しいものを取り入れようとする人が多い。ただ、人の面では多様性を受け入れる器があると思います。インフ

ラ面は弱い!日本語がある程度できる人でないと厳しい部分もあると思います。中野の飲み街は世界的にも珍しいと思うので、そういう部分のインフラが整うと、もっと多くの人が来てくれるのかもしれないですね。

この先、中野はどんなまちになってゆくののでしょうか。」

「新しいものはお金をかければ作れるけど、歴史はお金をかけても作れないですよ。開発された場所と飲み屋街など、新と旧が共存するまちになってほしいと思います。」

山本さんにとって、中野の街とはどんな街なのでしょう?」

「一言で言うたら、『人のつながりのある街』ですね。困っていたら、誰かが誰かを紹介してくれる。街のイベントに行くと、誰かに会う。東京は人のつながりが薄いと思われるけど、一歩踏み出せば、中野の街は寛容だからたくさんの人とつながることができると思います。常連さんや外からのお客さんで毎日賑わっている麦酒大学。一杯飲んで、さあ次はどこへ行こうかな。」

Profile

山本祥三さん
麦酒大学オーナー



コアな麦酒ファンから

地域の中野ファンまでを魅了する
麦酒大学。そのうまさの秘密は、

中野への想いにある。



Beer

Profile

酒井直人さん
 特定非営利活動法人ストリート
 デザイン研究機構・理事長
 元中野区地域包括ケア推進担当副参事



行政でのお仕事の枠を飛び越えて、
 中野のまちで人をつなぐキーマン・
 酒井さん。
 まちで人と人をつなぐ、
 おもしろさを聞きました。

行

政の方、というところか
 堅いようなイメージを
 持つてしまいますが、酒井さん
 を前にそんなイメージは吹き飛
 びます。お仕事の傍ら、NPO
 法人ストリートデザイン研究機
 構の理事長としてまちづくりを
 進めている酒井さん。

まちの人々を繋ぐ面白さをお
 聞かせください。

— 広報担当にいたときに、中
 野区の観光協会と関わったのが
 きっかけで、まちづくりについ
 て考えるようになりました。街
 の『人、歴史、もの』を知って
 初めて街のことを知ったと言え
 るじゃないですか。一つ一つ
 知っていくうちに、街のことが
 好きになっていきました。

ストリートデザイン研究機構
 では具体的にどんな活動をされ
 ているのでしょうか？

— 人と人をつなぐ、そのた
 めの色々な取り組みをしてい
 ます。人と人をつなぐこと
 で、新しい出会いやチーム・プ
 ロジェクトが生まれます。そう
 いう入り口づくりをやっています。
 というのも、はじめに観光
 協会と一緒に仕事をしたとき、

『人と人が繋がっていくのはす
 ごいことなのだ』と思ったん
 です。そこから、もっと誰でも
 参加できるオープンな会をまち
 で開催して、多くの人を繋ぐこ
 との可能性を感じました。だっ
 て、中野の街は多様じゃないで
 すか？日本で一番LGBTが
 多く住んでいると言われてい
 る街でもあるし、木造の賃貸住宅
 が多くて日本の各地から東京に
 出てきて中野に住んだことがあ
 るという人が多いという歴史も
 持っているまちです。だからこ
 そ、この街ではどんな人も浮い
 たりしないですよ。これは、
 中野らしさだと思いますよ。そ
 ういう多様な人たちが出会っ
 て、新しいものが生まれていく
 のを見られるのは、この活動の
 醍醐味ですね。

— この先、中野のまちをどんな
 まちにしていきたいですか？

— 人口減少が進んでいくの
 で、都会の役割として日本の経
 済を引っ張るということがあり
 ますよね。中野はその原動力に
 なっていきたいと思います。ど
 んどん若い人や外国人などの多
 様な人たちが、新しい価値を生
 み出していく街であってほしい
 し、そうなると思いますよ。

— 最後に、酒井さんにとって中
 野のまちとは何ですか？

— 終の住処ですね。今までで
 一番長く住んでいる街ですし、
 いい街であってほしいです。だ
 から、街のために何かしたいと
 思っています。自分のまちは、
 自分で何とかなる。それが原則
 ですね。

『自分のまちは、自分で何と
 かなる。』その言葉にハッとさ
 せられました。私が自分のまち
 にできることは、何なのか考え
 させられました。

「自分のまちは、自分で何とかなる。
 それが原則ですね。」



まち人の想いを鳴らす 「NUNO JAZZ FESTA」。

沼袋・野方のまち全体がステージとなり老若男女が楽しめるイベントの原点も、辰巳さんに聞きました。



2 017年で10年目を迎えた「NUNO JAZZ FESTA」。このイベントを始めてみようと思っただけじゃなかったのか。

— 町で女性が平日の昼間に楽しめるようなイベントがあったらいいよね、と仲間と話していたんです。なんとなく時間に追われるような生活になっていたので、ゆったりリラックスできるような有意義な時間の使い方はできないかなと考えていて、1回目は地元のリライブハ

ウスのオーナーさんをお願いしてまちおこしジャズをはじめました。最初は女性のためのイベントだったけれど、男性も入りたかったという声を聞いたりして、闘志がわいて次はみんなが入れる「クリスマスジャズ」をやります！なんて言ってしまいました笑。2回目からは神社やお寺のホールを借りたので、お香の香り漂う中でクリスマスジャズでしたね。それらを通して感じたのが、このイベントは老若男女が楽しめるものなんだ！ということでした。

— そもそも、神社やお寺でジャズはつてありませんでしたか？

— そりやりましたね笑。でも、ジャズっていうのは一番わかりやすい音楽なんです。どんなジャンルの音楽でもジャズにアレンジができるから、老若男女に楽しんでもらえる音楽なんですよ。「わかりやすい」というところは大切にしているポイントで、誰にでも楽しんでもらえるようにしたいと思っています。おかげさまで今では、1、500人くらいが来てくれる大きなイベントに成長しましたね。

とても賑わうイベントですね！スポンサーはどのように集めているのですか？

— 最初は、知り合いにイベントの企画の話をして、そのまた知り合いを紹介してもらおうという感じでしたね。そうやって色々な人に出会い、ました。

— そういう部分に、まちのつながりがあるんですね。

— そうですね。つながりは感じます。子供の時から、祖父が地元の町会長をやっていたり、町に力を注ぐ姿をみてきました。幼い頃からずっと町に见守られている感覚もありましたし。毎日、向こう三軒両隣を意識するような生活でしたね。だから、町のために何かをするのは特別なことでもなんでもないと感じます。つながりどころか、それに勝るものを生み出した時からずっと感じていて、そういうバックグラウンドがあったからこそ、NUNO JAZZ FESTAをやっているのだと思います。

— ちよつとすつ、商店街の街並みがチェーン店で埋められて行ってしまう寂しさですかね。良い言い方をすると、綺麗になってゆくということでも、野方らしさ、みたいな部分がどんどん綺麗になつてゆくのは少し寂しそうですね。野方は、商店街が6つもあって、こちやこちやしています。それが野方らしさというような気もしています。NUNO JAZZ FESTAを通じて外から来た人にも野方を楽しんでもらって、商店街のお店に良い影響を与えてくれればと思っています。



Profile

辰巳まゆみさん
沼袋・野方まちおこし
ジャズ実行委員長

— 中野のまちは、みんな仲間を持っていきます。その仲間どうしがつながって、もっと新しいものが生まれて行ったら、おもしろくなるのではないかなと、思っていますよ。

— Facebookやメールなど情報ツールが便利になった世の中だからこそ、実際に会った時に等身大の自分らしさを見せることが大切だと教えてくださった辰巳さん。今を感じ、誰でも自分らしく楽しめるJAZZを、これからも中野のまちで響かせてほしいと思いました。



Profile

大澤宏之さん
つながる中野代表

『お互い様の関係』をまちの中でつくってゆく。
世代がつながるコミュニティを支える大澤さんに、
中野への想いを聞きました。



ながる中野の会長として、今や中野の人々を繋ぐキーパーソンである大澤さん。中野のまちへ大澤さんが来たのは、結婚を機に家を持ったことだったそう。哲学堂公園でのボランティアをきっかけに、中野で活動しているグループをどうやったら次世代へと引き継いでいけるのかと考えたと言います。

そこからどのようにして、つながる中野が生まれたのでしょうか。

— 今ある活動をどう続けていくかをみんなで考える場を設けていたら、新しい活動や本当に様々な活動を進めている人が集まる相談の場になったんですよ。ほら、僕らの世代は、若い人と年齢が高い人の間に入って通訳

するのが役目ですよ。育つべき

環境が違う人たちの話を、双方がわかりやすいように伝えられるのが僕らだから。そうやって悩みや相談ごとを共有できる場になっているうちにね、若い世代も入ってきてくれるようになって、若い人たちが活動を引き継いでくれるものまで出てきました。どんどん、世代の幅は広がってますね！

人がつながる場をつくる上で、心がけていることが何でしょうか？

— お互い様の関係を、どうにかして作っていくことでしょうか。いつも心がけています。みんな、ある時はお世話になっていて、ある時はお世話している。そういう環境にしていると、自然と「私これできますよ」が出

てくるんです。そうしたら、お金ではない、お互い様の関係が作れますよね。メンバーの内訳も、本当に多様です。世代も性別も職業もバラバラ。だからこそいいんです。

大澤さんは、つながる中野の活動を通して、中野にどんなまちになってほしいと思っていますか？

— 僕は、中野のまちがまわりの町と比較して、これだけ光り輝いているんだよっていう風に思えるようなものを、みんなの力で一つずつ作っていきたくて思っています。「あのまちはこれがあるから住みたいよね」と言われるような。町全体が温かいような。そんなまちにしたいですね。

利益が出なくても、地域のためにやりたいことを実現しやすくすること、それをやっていきたいんです。



世界と日本のかけはし、 “世界ビト図鑑”を発信する酒井さんのルーツ。

お 父様の赴任先香港でアジアの国の様々な友達とふれあい、アジアのことをもっと知りたいと思ったり世界にでることのおもしろさを感じたりしたという酒井さん。

どのようなお仕事をこれまでされてきたのでしょうか。

— 就職してからは、様々な企業で秘書の仕事をしていました。海外事業や海外進出に関わるような仕事を多くしていました。でも、2011年の震災の時「生きているってどういうこと？動くて何？時間を使っているだけで死にたくない」そう思いました。それをきっかけに独立をして、中小企業の海外展開を支援する事業をはじめました。ノウハウも資金もあまりかけられない中小企業にとって、パートタイムで海外事業のことを専門的に前にすすめてくれる人がいたら、海外展開をしやすと思うって。

いこともしたいな」と思いました。日本の若者が国際社会のなかで元気がなくて受け身だと感じていたのもあってね。能力はあるのに、表現できていないひとが多いなと思って。世界と関わるということには、ちゃんと必要な知識を与えてあげないと、表現できるようにはならないと思っただけです。

その想いが形になったのが、『世界ビト図鑑』なのです。

— そうです。まず最初にしたことは、じつは世界で色々な日本人が活躍しているんだよということ子どもたちに見せること。刺激になるのではと思っただけです。そこには、スーパーヒーローみたいな人ではなく、普通の人の人を取り上げたかった。子供時代も特別ではないし、何かのきっかけで世界と関わるようになった人たちを紹介しました。取材したのは、アジアで仕事をしている日本人で、職業も性別も多様なんですよ！いまは、この素材を使って、小学校や大学へ行って、世界で働くこと、これからの時代を生きていくこととはどのようなことなのかを話したりしています。なんと、私の通った江原小学校でも、5年続けて授業をさせていただいているんです。

明治の学生に対して、どんなことを思いますか？

— 学生さんは、表現できる力があるのに、隠したり周りの目を気にしているのがもったいないですよ。社会人になったら、協調性は大切だけど個性も出すべきだし、隠したりしないほうがいいはず。さらに言うとう、もう日本人だけとかっていう小さい枠で生きていく時代は終わっていると思うんだよね。どれだけ多様な人がいるのかを外にでて感じて欲しいです。世界って、広がるって面白いと思うんです。AIがでてきたりして、社会は変化してゆくけれど、江戸時代に武士が重要だったのには今は

もう必要ないのと同じで、変化にどう対応してゆくかが大切な部分です。

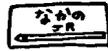
終始、笑顔で自身のお仕事や学生への想いお話しくださった

酒井さん。誰かと一緒になくていい、自分らしさを持って世界と関わっていかうと思うことができます。



「もう日本人だけとかっていう小さい枠で生きていく時代は終わっていると思うんですね。どれだけ多様な人がいるのかを外にでて感じて欲しいです。」

自分の街のことは、自分たちで決める。 まち・社会のことを考える入り口も 「おもしろく」するストリートデザイン 研究機構・立石さんの原点。



2 012年より、中野でストリートデザイン研究機構として活動している立石さん。はじめは、街の景観を研究したり、街に合ったルールを作ったりするのが主なお仕事だったそう。

そこから地域の人たちと深く関わりまちづくりを進めるようになったきっかけは何だったのでしょうか。

— 自分の価値観として、「自分の街のことは自分で決めたい」という思いがあります。僕らの世代って、人口が減少しているから僕ら一人一人がやるべきことを背負っていかねばいけません。少し上の世代だったら公共のサービスが充実していたとしても、僕らの世代からは変わってくる。そういう意味で、まちのことも自分で

として考えていきたいと思っ
たんです。そこで、まちのこと
をお固い雰囲気では話し合うよ
ろ、話したり考えたりするプロセス
を面白くしたいと思いました。
「市民主体のまちづくり」をし
たいと思っただけはそこで
すね。

立石さんは区議選にも出馬さ
れた経歴がありますよね。出
馬時にはどんな街にしたいと
思っていたのですか？

— 中野には大学が出来て若い
人が増えたけれど、結婚して子
供ができる街を離れてしまっ
て傾向があるんです。人のつな
がりや信頼関係があると、管理
や監視体制が必要なくなるとい
う意味でも、コミュニティは街に
とってとても大切なものです。
だから、そういうコミュニティ
を活発にして、若い世代が定着

するようなまちにしたいと思っ
ていました。今は駅前の開発な
どもあって、活気が出た一方で
チェーン店も増えました。そう
いう部分のパラドクスも、うまく
保ちたいなと思います。「不易
流行」。これをうまく利用して
いるのが中野のまちだと思いま
す。きちんと守られているもの
もありながら、新しい風も受け
入れていくようなね。観光協会
が民間主体で作られていたり、
中野のまちは他のまちへのモデ
ルにもなれると思いますよ。

自分からまちへ出て行かれる
様子が活動的だなあと思うので
すが、立石さんはいつからまち
づくりに興味を持っていたので
すか？

— 高校生の時から、このまま
じゃ自分も社会もやばいんじや
ないかと思っただけです。そう
いう思いを持っていたことが
、地域づくりの大学院へ行っ
て、地域活性化について行政・
文化・企業のあり方などを学び
ました。でも、理論を勉強して
いても結果論でしかないと思っ
てしまって。成功体験を紐解い
てみると、一人何かやり始めた

「成功体験を紐解いてみると、
一人何かやり始めた人がいて、そこに偶然の
つながりが生まれて、その人たちと関わって
いく中で新しいものが生まれて、
成功したみたいだなと思ったんです。」



Profile

立石りおさん
特定非営利活動法人ストリート
デザイン研究機構
専務理事 / 事務局長

人がいて、そこに偶然のつなが
りが生まれて、その人たちと関
わっていく中で新しいものが生
まれて、成功したみたいな形だ
なと思っただけです。だから、勉
強していてもあんま意味ないん
だなど笑。理論も大切だけれ
ど、行動もしないと、思っ
動き始めました。行動して結果
のフィードバックが欲しかった

という部分もありましたね。失
敗をする場合って、理論から間
違っているのかそれともやり方
に問題があったのかのどちらか
ですよ。そのどちらが原因・
要因なのかは、やっぱり実際に
やってみないとわからないなど
感じました。イベントとか小さ
な活動は、動くことが大切で
すかね。都市計画は、もつと勉強

することが必要だとも思いますが、ソフトな部分については、動いた方がいいのかなと今は思っています。

ストリートデザイン研究機構として、これからのような活動をして行かれるのですか？

― 街に関わる入り口やきつかけを作りたと思っています。まちに興味がなかった人が、なんか面白いなあと思ってもらえるように。漫画から世界を考える講座など、面白いところから攻めたいですね。漫画とかって、以外と世相とか政治的な要素が含まれていることがあるんですよ。中野に対しては、前まではこの街を変えなきゃと意気込んでいた部分もありましたけど、今は生活者としてこの街にちよつとでもプラスになるように生活したいなと思います。

まちに関われる「おもしろくて楽しそうな入り口」をみんなにつくるうとされている立石さんのお話を聞いて、主張や想いをぶつただけでなく一緒に巻き込んでゆくことの可能性を感じました。

Episode*8

中野のまちで、鷺宮で、人のパイプをつないでゆく！
鷺宮商店街を盛り上げる田中さんのこれまでと現在地、そして未来を聞きました。



Profile

田中章生さん
中野区商店街連合会青年部 部長
鷺宮商明会 副会長

「慣れた環境にずっといると、進歩しないですよ。そこから出るとき、進歩する。」

中

野区商店街連合会青年部
・部長や鷺宮商店街の商
明会副会長をされている田中さ
んですが、具体的にはどんな活
動をされているのでしょうか。

― 鷺宮商店街のメインの活動は、商店街を活性化することでですね。イベントを考えたり、どうしたら商店街に人が来てくれるかを考えたり、企画から運営までしていますよ。もう一つ、中野区の商店街連合会の青年部長もあります。区内にある100個くらいの商店街で活動している若手を束ねています。情報交換をしたり、その商店街ではどんなことをやっているのかイベントの結果を共有するのがメインです。要するに、「横のパイプをつなぐ」お仕事ですね！自分の仕事があつて、その上にボランティアを重ねている状態だから、大変つちや大変ですが笑。

大変だけど、やるうと思えるのはどうしてですか？

― 生まれたこの土地でできる人間がやらないといけないと思っています。サラリーマンをやつて戻つてきて、最初は嫌だったけ

れど、仲間ができて同世代とながると楽しくなりますね。まずこの活動をしているのは、楽しいからです。誰かが地域の次世代になつて賢いといけないんじゃないですか。中心のものを担っていくかといね。僕らが軸としたいかといね、街の元氣も失われちゃうと思っています。使命感と言つたら大げさかもしれないけれど、僕自身も今はできるし、この街が好きなのでやらせてもらっています。

まず一番は楽しいこととおっしゃっていましたが、サラリーマンから地域に戻つてきて大変だったことはありますか？
― 最初はね、みんな大変なのすでにあるコミュニケーションに入っていくのは勇気がいることで、みんな自分より年上の人たちばかりだからね笑。でも一つのところでしつかりとやっているとそれが自信になり、他のところでも「こいつ出来るな」と引つ張り上げてもらえます。そしてやはり大きいのは仲間が存在で、バイタリテイのある人に出会えて成長できることが、大変だった頃の心の支えで

した。自分の商売だけに閉じてもっているとか成長するチャンスを見逃してしまうけれど、今いる環境を一步飛び出して、色々な人の話を聞いたり色々な人と会ったりすると、刺激を受けて視野も広がります。慣れた環境にずっといると、進歩しないですよ。そこから出る時、進歩する。自分も地域に出たことで、丸くなった成長できたと思っています。いろんな人と会って話を聞くだけでも、この人の生き方って面白いなと思って真似ていくだけでも、意味があると思いますよ。僕の場合、もともと新しい人に会うのが苦手なタイプだったんですが、今のようない場になったたかさんの人と話すようになったことで、コミュニケーション力がついたと思っています。そこは、とても役に立っているスキルだと思いますね。

か？
I まちの形は、自分たちの力ではどうにもならないと思っています。一番残したいのは、コミュニティですね。まちって、人がいてもつながっていません。ただでなく、コミュニティ同士がつながっていくことが大切だと思っています。コミュニティは逃げないし、なくならないから、学生とか出て行った人が戻ってくる場所になると思うんです。みんな安心して戻ってこれる。出て行っても、ここにあるから。そういう安心感があれば、送り出すときも怖くないんです。なんかあったら声かけるし、かけてよ、みたいなね。だから、コミュニティを残していきたい。けるまちにしていきたいです。

日頃から明治大学の学生も面倒を見てくださっている田中さん。様々な世代や所属の人たちをつなぐパイプ役として、楽しみながら活動されている姿に、私も負けていられないとワクワクしました。

Episode* 9

『一緒に楽しむこと』から多様性は生まれる。



左手がカルビンさん

Profile
Calvin Hokama さん
(アメリカ出身)
ANIC 英語講師

日 本語教室や文化イベントの開催など、街の国際化を支える中野区国際交流協会 (ANIC)。

そのANICで英語講師を務めるCalvinさんにお話を伺いました。

どのような経緯で中野に来られたのでしょうか。

— 29年前に単身赴任でアメリカから来ました。アメリカではカリフォルニアの大学で英語を教えていたのです。そして中野(新井業師)にある東亜学園で働くチャンスがあって日本に来ました。はじめは1年間だけの予定だったんだけど(笑)

— 27年間教えた東亜学園をおとし(2016年)退職しました。今はANICのほかにも、馬場にある日本外国語専門学校でも教えています。

— 単身赴任で29年間というのは長いですね！英語を教える国としてなぜ日本を選んだのですか。

— 私は日系3世です。両親はハワイで生まれ、祖父母は沖縄で生まれました。そういった自分のルーツから、日本には興味がありましたね。

なるほど。ANICではどのような方に教えられるのでしょうか。

— 50代〜80代の日本人の方々に週に1回英語を教えています。

す。ほとんどのの方が退職されています。2つのグループに教えているんですが、1つのグループのレベルがとても高いのです。「海外へ行ったところがありますか。」と聞いたところ、「ヨロッパの大学で科学を教えた」「オーストラリアに長年住んでいた」とか、「60か国を旅したことがある」と言っていました。彼らの高い英語力にはとても驚きましたよ！

海外経験の豊富な方が多いですね。中野を長年見守られてきたと思いますが、この街の多様性についてどうお考えでしょうか。

ー 10年程で大きく変わりましたね。多様性とは他者の違いや個性、バックグラウンドを受け入れて尊重することです。昔の日本は外国人に会う機会が少なかったですね。だから他者を理解せずに怖がっていたように思います。でも今はどこでもたくさんの外国人がいますよね。それは多様性を理解するう

シンプルが一番です。難しいことをやる必要はないと思います。ただ一緒にゲームをするだけでも自然と友情は芽生えますよね。それがとても大事なことです。

えて大きな助けになっていると思います。ただ彼らについて勉強するだけではなくて、実際に会うことで新たな学びが必ずあると思います。例えば一緒にスポーツをするというのも良いですね。何か同じ経験をすることやコミュニティに参加することがさらなる多様性を創る一番の方法だと考えています。そうですね。経験を共有することはお互いを理解するきっかけになりますね。

ー シンプルが一番です。難しいことをやる必要はないと思います。ただ一緒にゲームをするだけでも自然と友情は芽生えますよね。それがとても大事なことです。意見を交わすというように硬いものではなくて、単純に楽しめる機会がもっとあればいいなと思いますね。先日、メキシコ、インドネシア、中国、韓国、ニュージーランド出身の人たちと山梨へ行きました。イベントがなければ話すこともなかった人たちと出会えて本当に楽し

かったです。そういうイベントがもっと開催されるいいですね。そして楽しんでもらえればいいと思います。そうすれば自然と友達になれます。最後に、中野を一言でいうとどんな街でしょうか。

ー "Progressive"かな。10〜15年前と比べると急速に変化していますね。これはただ大きな建物が増えたということではなくて、多様性に対する考え方も、サンモールにも本場にたくさんの外国人が訪れていますよね。異なる文化グループによって街はどんどん多様になっていると思います。大学ができたことは大きいですね。新たな文化や新たな世代を街に連れてきてくれました。

外国人インタビュ어의トッパッターがOggieさんでした！緊張する私たちに温かく接してくださいました。ありがとうございました。

Episode* 10

多様な文化や人が集まる ファンキーな街＝中野



東

亜学園で英語講師を務めるアメリカ出身のジョーさん。英語と日本語を交えながら、中野への想いを話してくださいました。中野にはいつ頃来られたのでしょうか。

ー 中野に来たのは4年前ですね。6年ほど前に友達が中野ロードウェイに連れてきてくれました。その時に、チャンスがあったら中野に住みたいなと思いました。東亜学園では1年半

Profile
Jonathon Davis さん
(アメリカ出身)
中野区
東亜学園高等学校の英語講師

前から英語を教えています。東亜に来る前は個人レッスンや英会話スクールなど、色々なところで教えていましたね。

中野に住んでみたいと思った理由は何だったのでしょうか。

— 高円寺には、パンクやヒッピーのような独自のスタイルがあるとあります。渋谷だったら、若い人が多くておしゃれなイメージがあります。中野はそういった街とは違った雰囲気ですよ。クールすぎないところが良いです。あとは外国人がたくさんいるところに住みたいくありませんでした。日本語を練習したかったですし、文化に触れたかったからです。もし高円寺や渋谷に住んだら、ほかの外国人と一緒にいることが多いと思うので、中野は大きくて便利なお店、ブロードウェイのような面白い部分も持っているのが良いですね。それに居酒屋がたくさんある伝統的な地域がありますよね。その一方でモダンな部分やファンキーなお店もたくさんあるのが面白いと思います。

様々な文化がミックスされて

いるのは中野の魅力の一つですね。中野で好きな場所はどこでしょうか。

— 最初に気に入ったのはブロードウェイですね。初めて日本に来たときにクールジャパンを感じました。中野に住んで生活に慣れていくうちに、居酒屋やバー、ラーメン屋があるエリアが好きになりましたね。『パークチーハイ』という変わった飲み物があるタイ料理屋さんがあるんです。中野はお店が小さくてわかりにくい場所にあるところも好きですね。

確かに中野には小さなお店がたくさんありますね。地域の方々と接する機会がありますか。

— ありますね。東亜学園の近くに住んでいるのですが、近所のお店にとっても可愛らしいおばあちゃんがあります。買い物をするときにいつもおしゃべりしています。私は広いアパートを求めて都立家政に引っ越したことがあるのですが、4か月後に中野に帰ってきた時、おばあちゃん「どこに行っていたの？」とお店に来なかつた僕を心配してくれました。他にも文房具屋

さんでよくオーナーとおしゃべりをしますね。

お店の方とのコミュニケーションがあるんですね。中野が改善すべき点はどんなところだと思いますか。

— 歩きタバコをする人が多いことですね。冬は特に問題だと思います。子どももたくさんいますし、危ないですよ。今の時代は世界中で禁煙が広がっています。2020年にはオリンピックが開催されて、たくさんの方が来るので歩きタバコについて文句を言う人がいるかもしれません。歩きタバコを取り締まるのは難しいのかもしれませんが、改善されるといいですね。

最後に、中野を一言で表すとどんな街でしょうか。

— 最初に思いつく言葉はファンキーですかね。中野には、年配の人、若者、サラリーマン、もちろん大学生など多様な人がいますよね。下町な雰囲気もおしゃれで現代的な部分も、オタク文化もあります。中野を歩くとも面白いと思います。生き生きしてファンキーな街だと思います！

言葉の節々に中野への愛が感じられたインタビューでした。ありがとうございました。

中野には、年配の人、若者、サラリーマン、もちろん大学生など多様な人がいますよね。生き生きしてファンキーな街だと思えます！



一回きりの人生を、自分の人生と家族、そして街に捧ぐ。
野方北原通り商店街会長小川さんに、
商店街を盛り上げるための
工夫と試行錯誤の日々を聞きました。

小 川さんはファッションハ
ウス・ウエルカムを営み

ながら、商店会長として野方北
原通り商店街を活性化するお仕
事をされているのですよね。地
域で活動するきっかけや意識し
ていることはありますか？

「まず、地域で活動するきっ
かけになったのは、この街で商
売をやらせてもらったということ
に対しての恩返し気持ちです。
生まれも育ちも野方ではないの
で、偶然この街に出会って、20
年も順調に商売をやらせてま
らっていることへの感謝ですね。
地域活動をするにあたって意識
していることは、「ボランティア
は自分一人ではできない」と
いうことです。私がボランティア
をしている間、お店のことや
家庭のことは家族が代わりに
やってくれています。そういう
意味で、ボランティアは周りの
協力なしではできないし、「やっ

てあげている」という自己満足
に落ち着いてはいけないと思っ
ています。中野には本業をしな
がら地域で活動している先輩た
ちがたくさんいますが、皆さん
そういう気持ちで大切にされて
いると思いますよ。

確かに私たち学生も、家族の
支援あつて初めて大学での学び
や経験を得られるということを
思い出さなければいけないです
ね。商店会長になってから、具
体的にどんなことをやられたの
ですか？

「商店会長になったからには、
自分のお店だけでなく商店街一
つ一つのお店が繁盛するように
しないといけないです。そのた
めに、他の街や商店街へ行って
みて、いろいろな情報を得ると
にかくチャレンジしてみました。
その中でも挑戦してよかったの
は、荻窪の教会通り商店街から
ヒントをもらった、時刻表を兼

ねたマップ作りです。私は野方
に應用する時、電車だけでなく
バスの時刻表をウラに載せた

マップを作りました。そうする
ことで各家庭で時刻表としても
使ってもらえるし、商店街へ出
向いてもらうきっかけにもなる
んです。一年に一回、時刻表が
改訂されるタイミングで、マッ
プも新しくできるから、商店会
に会費を出してきてくれるお店
も嬉しいですよ。

もう一つやっていることは、
商店街の横のつながりをつくる
ことです。例えば年に一回新年
会として商店街全てのお店が集
う場を作っています。ワンコイ
ンで参加してもらっていて、そ
ういう場には議員さんも来てく
れるので盛り上がるしコミュニ
ケーションの場としては良いと
思っています。こういう場を作
ることで、些細ないざごぎを防
ぐことができますし、屋号では

なく名前で呼び合うような関係
が作れるんです。やっぱり、屋
号より小川さんって呼ばれた方
が嬉しいですよ。最近では若
いオーナーも増えて、多世代で
風通しの良い商店会になってき
たと思っています。

小川さんはたくさんの方とコ

ミュニケーションをとる機会が
多いかと思いますが、大切にさ
れていることはありますか？

「僕にとって、人と接するど
き学歴は関係ないです。その人
がどんな人生を生きてきて、ど
んなことを考えているのかが大
切で、何歳でも尊敬する人はし



Profile

小川和彦さん
ファッションハウス・ウエルカ
ム代表
野方北原通り商店街会長

「僕にとって、人と接するとき学歴は関係ないで
す。その人がどんな人生を生きてきて、どんなこ
とを考えているのかが大切で、何歳でも尊敬する
人はしています。」

ています。どんな年代、どんな属性だろうと、私にないものを持つている人はとても尊敬しますし、ついて行こうとも思えません。学生さんも、いろいろな人とコミュニケーションを取るのがいいと思いますよ。その出会いに意味があるかないかではなく、確実に将来の役に立ちます。ネット社会と言われますから、面と向かって話すより便利なものがあるのもわかりますが、やっぱり直のコミュニケーションが一番だと私は思います。一歩勇気出して話をしに行ってみるか見ないかで、全然違うと思いますから、とにかくやってみることでですね！

野方のまちにも、外国人のお客様さんも増えてきました。お年寄りとも、外国人とも共生していかないといけない状態になっています。学生さんにはぜひ、小さいところからでも地域に入って、チャレンジして欲しいですね。

Episode*12

中野区の国際化を支えるANICで、 日本語支援の旗をふる鈴木さん。 まちのグローバル化において 今必要とされていることとは。



Profile

鈴木加奈さん
ANIC 勤務



今は、中野区国際交流協会（以下ANIC）で

中野区の国際化に深く関わっている鈴木さんに、中野区への熱い思いを伺ってきました。

ANICで様々な活動をされている鈴木さんですが、その活動内容について教えてください。

私が担当している主な事業は、ウエリントン市との友好交流事業と子供向けの日本語支援や、年に何回かある国際理解の授業です。中野区はニュージールランド・ウエリントン市の中学生どうしの交流を30年以上続けていて、毎年交互にホームステイの受け入れを行っています。今年10月にはニュージールランドから18人の中学生を受け入れました。そして子供向けの日本語支援ですが、こちらにもいくつか種類があります。学校にANICから日本語の指導員を派遣することもありますし、日本語が全くできない中学生は、ANICに来て日本語講座を受けてもらいます。ここでは校長先生の許可を得て、子供たちは学校の授業を受ける代

わりにANICで日本語を学ぶことが出来るんです。子供たちの勉強に対する熱量は人それぞれで本当に様々ですが、1人1人にきちんと寄り添うようにしています。日本語ボランティアの方も非常に熱心で、自分たちで教え方の勉強会もされています。ANICの日本語講座は、多くのボランティアに支えられています。来年30周年を迎えるANICの日本語講座は、これからも維持していきたいと思えますね。

本当にたくさんのごことをされているんですね……鈴木さんがANICで働こうと思ったきっかけは何だったのですか？

私はずっと、世界中の人と友達になりたい！と思っていました。だから若いうちは世界中を旅したいと思っていました。けど、やっぱり社会人はそんなに移動できないなと思って。ここ中野区にも今まで住んだことはなかったのだけれど、私が学生時代に留学していた北京にある西城区が中野区の友好都市だったんですね。だから、留学で経験したことが中野で活か

せるんじゃないかと思って、ここで働くことを決めました。実際に働き始めてみたら本当に中野区にはいるいるな国の方が住んでいらっしやるのが分かりました。ANICの日本語講座で学んでいる方だけでも約50か国。中野区全体では100か国以上の様々な国籍の方が暮らしています。

確かに中野にはいろいろな国の人がいて面白いですよ。働き始めて、何か鈴木さんの中で心境の変化はありましたか？

— 自分が思っていることが普通とは限らないと、すごく感じるようになりまして。中野には色々な人がいるので多様な人と話す機会が多く、みんな違った価値観を持っているとわかります。その中で自分の価値観を押し付けられることなく互いを尊重しあっていることが大切だと思えますね。

相手との考え方の違いを認めて尊重しあうことって、簡単そうて意外と難しいですよ。では、鈴木さんにとって中野はどんな街ですか？

— 中野はね、本当に人がおもしろい街です。日本語講座のボランティアの方もパラエティに富んでいて、とにかく皆さん元気。中野って都会なのにまちな人同士がとても近くて、下町のようない雰囲気がありますよね。誰かが何か新しいことを始めたら、それいいね！と言って協力しあえるような雰囲気のある街なんじゃないかなと思います。確かに中野って、頑張っている学生のことを応援してくれる人がたくさんいるし、新しいものをどんどん取り入れることに寛容なイメージがあります。最後に、今後の中野についての話を聞かせてください。

— 中野に限らずですが、グ

ローバル化と言いながらどんどん内向きになっていて、子供たちが視野を広げるチャンスが減っているような感じがするんですよ。学校でも週に何回か英語の授業はあるけど、外国人と話したり交流したりする機会はほとんどない。ANICでは、北京市西城区とは小学生の野球交流、ウエリントンとは中学生の教育交流で異文化体験の機会を提供していますが、子どもたちのためには、もっとこのような機会を増やすことができたらと思っています。子供たちに国際交流の機会を提供するのは、我々の役目でもあります。

明治大学の学生の皆さんにもご協力いただいて、新たな異文化交流プログラムができると思いますね。
鈴木さん、ありがとうございます！

『中野には色々な人がいるので多様な人と話す機会が多く、みんな違った価値観を持っているとわかります。その中で自分の価値観を押し付けることなく互いを尊重しあっていることが大切だと思いますね。』



もうすぐ卒業を控える4年生のPoyuさんに話を聞きました。

は良いですよ。そういつた海外と連携するような活動があるところが好きです。

キャンパス内ではかの留学生や日本人との交流は？

— 交流パーティーなどに参加して新しい友達を作っていますね。

中野で不便だと思ったことはありますか？

— 本当にないですね。駅構内の表示は英語や中国語が併記されているから、初めて来たときもスムーズに乗ることができました。

Poyuさんにとって中野はどんな街ですか？

— 日本に来てから一番通っている場所。キャンパス内でも留学生と日本人の交流があったり、商店街でも外国人と日本人が触れ合ったりしているところが好きですね。

中野の好きなところは？

— 商店街おいしい食べ物がたくさんあるところです。また中野には外国人が多いから、店員さんの対応がスムーズで違和感がないのも良いと思います。あとはセントラルパークで外国に関するイベントをやっているところが良いなと思います！異国の料理に触れられる機会があるの



Profile

Poyu Chenさん
(台湾出身)
明治大学国際日本学部 4年

フレンドリーで温かな街 「中野」で想うこと。



英

語教諭の Bryony さんはニュージーランド出身。中野区とニュージーランドの首都ウェリントン市は「中野・ウェリントン友好子ども交流」として中学生や高校生との派遣と受け入れを交代で行っており、つながりの深い国です。

日本に来られたのはいつ頃でしょうか。

— 11年前ですね。最初は北海道に4年間住んでいました。函館の近くにある森町という小さな

な街で英語を教えていました。

スノーボードやキャンプ、自転車、ハイキングもたくさんしましたね。アウトドアスポーツが好きです。中野に来たのは5年前ですね。

中野のどんなところが好きですか。

— 中野のコミュニティがとても温かくてフレンドリーなところが好きですね。特に ANIC (中野区国際交流協会) の日本語教室は素晴らしいです。

Profile

Bryony Dunlop さん
(ニュージーランド出身)
中野区にある東亜学園高等学校の英語講師



ニュージーランドから中野に来る交換学生は、ANICで無料の日本語レッスンを受けるのです。これは彼らにとっても良い機会になっています。ANICの方々はとても協力的で生徒たちの日本語の上達も早いですね。私もANICの日本語教室に通っています！あとはセントラルパークも好きですね。イベントにもよく足を運びます。ANICの人達のお店の手伝いもしたことがありますよ！

中野の改善点を教えてください。

— 観光案内所が駅の近くにあったら人気が出ると思います。日本では観光案内所を見つけることが難しい場合が多いです。観光案内所を探するのに地図が必要なときもありますね。観光案内所は駅の近くなど見つけやすい場所にあるべきだと思います。なるほど。では中野に多様性はあると思いますか。

— はい。中野は日本の他の地域より多様性があると思います。外国人に対してフレンドリーで歓迎してくれる雰囲気があるか

らです。そして日本語レッスンやたくさんのイベント、素敵なコミュニティがありますね。これまで携わってこられて、日本の英語教育についてどうお考えでしょうか。

— 以前、北海道では小学生と中学生に英語を教えていました。授業では楽しむことに重きを置いていて、小学生は学ぶのがとても早かったですね。小さな街でしたから、同じ生徒を小学校と中学校で教えました。中学に入学したての頃はみんな英語が好きなのです。それは小学校の時にとても楽しい授業をしていたからです。しかし中学に入ると文法の勉強ばかりで、初めての試験を終える頃には多くの生徒が英語への興味を失ってしまいました。文法だけではつまらないですし、役に立つと思えないですもんね。これが日本の英語教育の問題点だと思います。もう一つの問題点は『間違いを恐れること』です。日本では

誰かが間違った答えを言ったとき、他の人達は笑うことが多いですよ。これは特に子どもの話ですが、大人も間違えたくないという気持ちを持っていると思います。そこで私のクラスではルールを作りました。それは「誰かが間違えた時、他の人は絶対に笑ってはいけない」というものです。笑われることで人はすぐに自信を失ってしまいます。間違いは良いことです。私たちは間違えから学習しますから、日本人は完璧さにこだわらずに自然なコミュニケーションがとれないと思いません。コミュニケーション力を作る時、外国人の友達を作るときなど色々な場面で実用的ですよ。日本の英語教育は文法からコミュニケーション力の育成にシフトすべきだと思います。

明るく笑顔でお話してくださいました。Bryonyさん。ありがとうございました。

中野は日本の他の地域より多様性があると思います。外国人に対してフレンドリーで、歓迎してくれる雰囲気があるからです。

Profile

Gerz Muhammet Ali さん
 (トルコ出身)、高瀬ゲルズ 倫理さん
 ケバブカフェ エルトゥールル
 オーナーご夫妻



本場のケバブをこの街で。 地域に愛されるケバブカフェ エルトゥールル。

中

野駅南口からほど近くに
 あるケバブカフェ エル
 トゥールル。温かい笑顔が素敵
 なゲルズさんご夫妻にお話を聞
 きました。なんと、伺った日は
 奇しくもオープン周年の記念
 日でした！

なぜケバブ屋さんを始められ
 たのでしょうか。

「かねてから、本場のケバブ
 を伝えたいという思いがあった
 からです。日本でケバブとい
 うと、屋台で売っているジャンク
 フードというイメージを持たれ

ている方も多いかと思えます。
 でも、本場のケバブはヘルシー
 で、とても繊細に作られている
 のです。うちのこだわりは毎日
 ケバブを作ることです。実は作
 り置きをするお店が多いんです
 よ。毎日作ることで、ジューシー
 なケバブを提供することが出来
 るんです。そして、ケバブを作
 るにも技術が必要なんです。う
 ちで本場のケバブのおいしさを
 1人でも多くの方に味わって
 もらえればなと思っています。男
 性も女性も日本人も外国人もす
 べての人に食べてもらいたい
 すね。

本場のケバブは違うんです
 ね！私も知りませんでした。お
 店を作る際、こだわったことは
 ありますか。

「オールハラル対応とブレ
 イヤールームですね。調味料には
 お酒が含まれていないものを使
 用しています。「オールハラル」
 にすることが大事だと考えてい
 ます。そして、お祈りすること
 は生活の一部なので、お店の中
 にブレイヤールームを作ること
 は必須でした。ムスリムの人
 達が安心してお祈りできる場所

はなかなかないんです。うちで
 お祈りをしてから別の場所へお
 出かけされるなど、ムスリムの
 人達にとっての拠点になってら
 うのも良いなと思っています。

確かに日本では、ムスリムの
 人達への配慮というのはまだま
 だ少ないように思います。

「ムスリムと聞くだけで勘違
 いしてしまう人もいますね。営
 業中のお祈りについても始めは
 わざわざ言う必要がないと主人
 は思っていました。お祈りする
 ときは目立たないようにすーっ
 と行くんです。でも、お祈りを
 すること自体知らない人もたく
 さんいると思うんです。私は
 ちゃんと言った方がいいよと伝
 えました。主人が一人でお店を
 やっていた時は、お祈りの時間
 はお店を閉めることになるんで

ここで本場のケバブのおいしさを1人でも
 多くの方に味わってもらえればなと
 思っています。男性も女性も日本人も外国人
 もすべての人に食べてもらいたいですね。

すね。その時に来られたお客様
 は『この店は閉まっていること
 が多いな。外国人だから適当だ
 な。なんて思われてしまうか
 もしれません。そこで『お祈り
 中』という立て札を作りました。
 そしたらお祈りに理解してくれ
 るお客様も徐々に増えてきま
 した。お祈りって本当に生活の一
 部なんです。だから受け止
 めてくださるお客様がいらっ
 しゃることはとても嬉しく思
 います。

こちらのお店がきっかけでム
 スリムやイスラム教について知
 る方も多そうですね。お客様の
 ほかにも、地域の方々に関わる
 機会はありますか。

「こちらの(中野の)商店会
 に参加しています。お店の仕入
 だけでなく普段の生活の中で

もできるだけ地元のお店に行くように心がけていますね。そこでお店の方々と交流を楽しんでいます。地域に受け入れてもらうには、こちらからオープンになっていくことが大事だと思います。

地域の方々と積極的にコミュニケーションをとる姿勢、素晴らしいと思います。

— みんなで地域を活性化出来たらという思いがあります。南口には個人経営のお店や会社が多くて、元気な方達が多いと感じますね。うちにも会社の方みんなでお昼を食べに来てくださることも多いです！

素敵ですね。中野の多様性についてはどう感じていますか。

— 多様な人を受け入れる蓋は開かれていますと思いますね。以前住んでいた新宿よりも、地域に根差した外国の方が多い印象があります。

中野の街についてご主人A-1さんが「好きな街」と答えてくださったことが印象的でした。ありがとうございます。

Episode*15

ベトナム出身一家の 温かなおもてなし。 中野に根付いた料理店 佑佳。



Profile

ホー・ツァイリンさん
(写真右、ベトナム/台湾 出身)
会社員

わいらしい笑顔のお母様
が迎えてくれるベトナム料理店 佑佳(ゆうか)。

このお店と共に中野で育った、ホーさんにお話を伺いました。ご両親が日本に来たきっかけは何でしょうか。

— もともと両親はベトナム出身で、ベトナム戦争が終結したときに台湾に移りました。そして初めは出稼ぎとして日本に来ました。アルバイトなどをしていて、永住権をとって今に至ります。父は日本に来てから30年ほど経ちますね。起業したのは27年前です。1号店や2号店を中野の他の場所で行っています。今の場所に移動してから5年ほどですね。

— メニューはベトナム料理だけでなく中華料理もありますね。昔からどちらもやられているのでしょうか。

— 最初は中華料理だけでしたね。当時、パクチーは受け入れてもらえませんでした。パクチーが入っていたらお客さんに怒られていたくらいです。でもだんだんとベトナム料理が流行ってきたので、うちでも出す

ことになりました。お年寄りは中華のほうが好きな方も多いので、中華料理もベトナム料理も提供しています。

台湾、ベトナム、日本という3つのバックグラウンドをお持ちなのですね。

— 台湾には親戚がみんないるのでよく帰りますね。両親にとっては第2の故郷が台湾です。ベトナムは3年前ほど前に家族旅行で訪れました。行く機会はなかなかないですね。幼少期にベトナムを離れてから、初めて行きましたね。

自分のアイデンティティについて考えると難しいです。日本で暮らして長いですが、あえて帰化していません。アイデンティティを忘れないために、名前も変えていません。パスポートも台湾のままですね。日本語が話せるので困ることがないのです。ただ選挙権がないのはちょっと悲しいですね。

— これまで中野で育ってこれた、街の変化は感じますか。

— はい、感じますね。明治大下町っぼくて、若い人も少な

かったです。キリンの本社などもできて、北口のにぎわいがさらに増したと思います。ここ5年ほどうちに来るお客さんの層も若くなりましたね。昔は少し入りづらい雰囲気があったと思います。ですが、内装と装飾を変えたことで女性が1人でも入りやすい柔らかな雰囲気になりました。

確かに、女性も入りやすい優しい雰囲気を感じます。中野の他のお店に行かれることはありますか。

ありますね。近場で外食をしたいというときに家族で行きます。おすすめは中華料理屋さんの謝謝です！安くて美味しいです。

では中野に多様性はあると思いますか。

中野には多文化を受け入れる器の大きさがあると思います。

中野には多文化を受け入れる器の大きさがあると思います。一生懸命頑張っている人を応援してくれますね。

最近では若者が増えて少し雰囲気が変わってきましたが、元々はそういう街だと思います。外国人を可愛がってくれと言いますか、一生懸命頑張っている人を応援してくれますね。

地域の方との交流も盛んですか。

そうですね。近くの中央公園で9月の3連休にお祭りがあります。毎年そのお祭りのあとはうちで食べてくれる方達がいらっしやあって、いつも予約が入っています。うちはローカル型のお店なのでインターネットで検索してもあまり情報が出てこないです。地域に根付いてやっているお店です。

優しい雰囲気のご家族でインタビュー後はほっこりした気持ちになりました。ありがとうございます。



“Mix”な町、中野

どうして明治大学中野キャンパスを留学先に選んだのですか？

明治大学国際日本学部が提供している English Takeプログラム（英語で学位が取れるコース）に魅力を感じたからです。そして東京に住んでみたかったから。大学生活を始めた頃には、中野でアパートを借りて、住んでいました。

中野の好きなところは？

ブロードウェイが好き。ブロードウェイには、おいしいレストランやアニメグッズ専門店が沢山あって、よく行きます。週に3、4回はブロードウェイで、ランチを食べに行きます。中華料理、タイ料理、台湾料理など多国籍

料理屋さんがおススメ。最近には特につけ麺が好きで、雑誌などで掲載されている高円寺のとある有名店が行きつけです。

中野に住んでいた時、外国人として何か困ったことはありましたか？

中野でアパートを借りる時かな。リーズナブルな物件を見つけても、外国人だから断られてしまったこともあったし；だから、私は大学が紹介してくれたエージェントを利用して、アパートを探しました。

中野での生活はどうですか？

中野は便利だし、快適でした。アクセスはいいし、周りに沢山のおいしいレストランがあるしね！

中野のダイバーシティについてどう思いますか？

大学内、特に中野キャンパスでは、ダイバーシティは十分に浸透しているじゃないかなと思う。しかし、大学外はまだまだかなと。違うバックグラウンドを持つ留学生と地域の方とが交流する機会がもっと必要じゃないかっ

て思います。

地域の人々と交流した経験はありますか？

昨年、白鷺町カンボジア料理教室（白鷺町会の方々、明大生、日本語学校の学生との交流会）に参加しました。この料理教室では、実際に地域の方々とお話しすることができて、とても貴重な経験でした。

最後に、中野を一言で表す何だと思えますか？

「Mix」だと思えます。新宿や池袋と違って、沢山の住みだけではありません。また、オフィス、様々な公共施設などがミックスして成り立っているのが、中野という町なんだと思います。そんな中野の町が好きです。



Profile

Cindy Zhou さん
中国出身
明治大学国際日本学部 3年生



Profile

碓井宏典さん
株式会社スフィアリンクス代表取締役
東京青年会議所・中野区委員会・委員長

まちと人を繋ぐ窓口 「中野まちづくりキャラバン」。 そこにはどんな想いが込められているのか。

中

野の人々と地域活動をつなぐ窓口をつくっている碓井さん。『中野まちづくりキャラバン』とは、どのようなきっかけで生まれたのでしょうか。

「まず、中野のまちで行なわれているイベントに街の人が参加したいと思った時、まとまった情報が見られる場所がないと感じたことがきっかけです。僕自身が地域活動をしていて色々な団体に加入している中で、ランニングフェスタやにぎわいフェスタなど、街で開かれているイベントの運営スタッフが同じメンバーになってしまっているという点も気になり、街の人で地域に参加したいと思っている人をもっと巻き込みたいと考えました。僕は「T」を使って

地域活性をしたいと思えば営業んでいるので、ウェブサイトを基点に地域の活動やイベントの情報を発信していきたいと考えています！

「T」を地域のために使ったゆくとするのは、とても新しく素敵だと思えます。どんな人に使って欲しいと思われていますか？

「学生、主婦、おじいちゃんおばあちゃんに至るまで、本当に多世代の方に使ってもらって地域に参加してきて欲しいと思います。例えば学生にとって、地域活動をする事で得られることは、人とのつながりだけではありません。会社に入ってから日々を続けていると、どうしても同じ会社の同じ部署の人たちだけで話すことになり、世界は狭くなっていきます。もし学生の時に、地域で活動することを通じて色々な世代の色々な価値観や人生に触れることができたら、広い世界を知りながら会社で働くことができますよね。そういう意味でも、学生さんには『中野まちづくりキャラバン』に登録してもらって、興

味があるものからいいから一歩入ってきてもらいたいと思います。

確かに、インタビューでお会いした皆さんの人生を少し知るだけでも、私の世界観は広がったと感じています。まちづくりキャラバンで地域に参加する人が増えていったら、どんなことが起きるのでしょうか。

「まちでの人づくり、人材育成が進み、新しい試みがチャレンジされやすい街になるのではないのでしょうか。もう一つ大切なのは、地域の人がお互いを見守るような文化が広がっていくことです。どちらも、まちづくりキャラバンを通して実現したいことです。多くの人たちがづくりに参加する場をつくることによって、まちでの経験を積むことができ、その経験をもちがう地域で活かすというサイクルができます。野方で学んだことを東中野でも、というよ

うな形で、中野のまち全体にモデルケースが出来ていくのではないのでしょうか。

また、高齢化が進む将来、個人個人が小さなことでも気を配れるようになるためにも、今からまちづくりに参加してもらったことは良い準備になると考えます。私自身、子どもができて中野のまちにお世話になるようになってから特に、地域の方の目があると安心だということや、子どもに地域で活動する背中を見てほしいという想いが生まれてきました。この『中野まちづくりキャラバン』をきっかけに、一人でも多くの人が中野のまちに関わり学び、安心して暮らせるようになってほしいと思っています。

ぜひ、明治大学の学生に『中野まちづくりキャラバン』を広めていきたいと思えます！想いのこもったお話、ありがとうございました。

「もし学生の時に、地域で活動することを通じて色々な世代の色々な価値観や人生に触れることができれば、広い世界を知りながら会社で働くことができますよね。」

まちづくりではそういう面白いことが起こる仕組み作りをやりたいです。

ソーシャルメディアの時代になって、今やいくらでも情報を得られるし発信できます。だからこそ、世界と日本の、これまでは当たり前じゃなかったけれどどきどきと光る人や文化・食などが中野で融合し、世界に発信できるものが生み出されるのではないのでしょうか。アールブリュットを応援する風土がある中野なら、装置を作るだけで人と人が自然に出会いコラボレーションし、中野発の新しい物が常に生まれるまちになると思います。まだまだ道のりは長いですが、そういう方向が中野の未来を創造する大きな原動力だと思っています。

つながりのある中野のまちを育てるのに30年という時間をかけてきた高山さんの言葉を聞いて、学生という枠を超えて人として、まちへの想いが強くなりました。ありがとうございます。



Episode* 18

エッジの効いた記事で中野を魅せる。まちを歩き、人の想いを日々伝えていく中野経済新聞・杉山編集長が見る、中野のまちとは。



Profile

杉山司さん
中野経済新聞・編集長
桔梗 ICT パートナーズ株式会社・
代表取締役

中野経済新聞の編集長として、ユニークで魅力的な記事を毎日発信している杉山さん。どうして中野で経済新聞を始めたのでしょうか。

「もともとIT系の会社で勤務していて、転職をするときから経済新聞に友人がいたことから経済新聞そのものに興味がありました。たまたま区長のお話を聞き、「誰か中野をアールブリュットしてくれる人はいませんか？」という言葉に、自ら手をあげたんです。それまで、東中野に住んでいながら「家は西新宿です」と答えていたくらい、中野という街に対して思い入れは強くありませんでした笑。でも、編集長になり毎日記事を書くためにいるいるな所へ行き、みなさんのお話を聞いて新しいことを発見するうちに、中野って面白いなと感じるようになりましたね。

なるほど。日々、第三者の目線で記事を発信している杉山さんから見ると、中野はどんな街に感じますか？

「中野は「はじまりの街」と感じます。まだ駆け出しの

お笑い芸人やIT企業、ベンチャー企業、小さなお店など、何かを始める人が最初の場所として選ぶのがこの街だと感じています。お笑い芸人さんは、中野、中目黒、六本木という様に移り住んでいくみたいで、中野にはたくさんのお笑い芸人さんがいますよ。そういう意味でも、中野に一度でも住んだことのある人は多いと思っています、みんな中野を離れても「中野いい街だったな」と思う人が多いのではないのでしょうか。ファミリー層が定着しないことを課題に思う人もいますが、私としては「人が何かを始める時に訪れるまち」として、流動性が高いこともありだと思っています。

確かに、小さな個人のお店なども多いように感じます。はじまりの街となりえているのは、中野にどんな要素があるからなのでしょうか。

「中野のまちには、来るものを拒まず、受け入れてしまう包容力があると思います。中野のまちの人は本当にまちのことが好きで、新しく入ってくる人に対して、嫌な思いをする人を

つからないようにしていると思
います。そういう土台があるか
らこそ、何かを始めたい人は安
心してチャレンジできると思い
ますし、そういう人を応援して
成功したら我が事として喜ぶ文
化ができたでしょうね。その
おかげで、中野には「〇〇発祥
の地」という肩書きがたくさん
あるんですよ！つけ麺、会員制
スポーツクラブ、カラオケマシ
ンなど、今では誰もが知ってい
るものも、元をたどると中野で
生まれたものがいくつもありま
す。

そんなに中野発祥のものが
あったとは！おもしろい歴史と
文化ですね。杉山さんは、どん
なことを意識して記事を書かれ
ているのですか？

そうですね。中野でチャレ
ンジしている人を取り上げて、
メディアにとりあげられていく
ようには意識しています。私の

「中野は『はじめりの街』です。まだ駆け出
しのお笑い芸人やIT企業、ベンチャー企業、
小さなお店など、何かを始める人が最初の場
所として選ぶのがこの街なのです。」

記事で経済を動かしたい、とい
う想いもありますが、読者は
もっと身近な情報が欲しいのだ
とも感じているので、エッジの
効いたおもしろい記事を発信す
るようにしています。中野は、
マニアの街です。サブカルの大
聖地のうち、秋葉原はオタク、
池袋はオトメ、中野はマニアの
街とされていますから、コアな
話題や中野ならではのトピック
を、エッジの効いた言葉で伝え
ていきたいと思っています。そ
のためにも、日々中野のまちを
歩き、お店やイベント主催者な
どからその想いを受け止めて伝
えられるようにしています。

今では中野のことなら誰にも負
けないくらい知っているという
杉山さん。私もそれくらい好奇
心を持って、たくさんの人を訪
ねてみたいと思いました。

留学生より 大人になったら 戻ってきたい街。

中野区の観光ビデオ出演
しているミエロさん。大学入
学と同時に中野で暮らしてい
る彼女に話を聞きました。
どういった経緯で中野にくる
ことになったんですか？

前の大学が八王子にあっ
て、中野で乗り換えをしてい
たので中野のことは認識して
いました。住まいの近くに大
きな病院があること、治安が
良いこと、一緒に暮らす彼氏
が早稲田大学に入学予定だっ
たので早稲田からもアクセス
がいいところを探していたら、
新井という地域に出会
いました。

中野（新井）に住んでいて
よかったですは何でしょう。
新井二丁目は立地がよく
て、駅からの距離がちょうど

良いですね。駅から遠いと思
便だけど、近すぎて騒がし
いので。大学の近くにはセン
トラルパークがあって、もう
少し北側に行くところと平和の森公
園があります。ランニングを
する時、バラエティがあって
良いです。風景を見ながら走
りたいときはセントラルパー
ク、人込みを避けたいなとい
うときは平和の森公園を走っ
ています。またちょうどいい
大きさのスーパーとして、イ
トーヨーカドー、ライフ、西
友などが揃っていて便利だと
思います。あとは住んでいる
マンションの大家さんがとて
も良い方でラッキーでした。

外国人住民率が高く、韓国
人と日本人の多文化家族や国
際カップル、同性カップルな
ども住んでいたんです。
中野の好きなところは何で
すか

イベントが1年中あると
ころが好きです。セントラル
パークや駅前のイベントは月
に1回行われていて良いと思
います。これからは外国人に
向けたイベントが開催され
らもっと良いと思いますね。
中野で暮らしてきて何か

困ったことはありませんか？

留学生の友達の家探しを
手伝ったとき、入居を拒否さ
れたことが何度かありまし
た。10社のうち、9社くらい
は大家さんからNGが出て
しまいましたが、私が電話をす
ると「いいですよ。」と言っ
てもらえても、実際に住む友
達の日本語レベルが分かった
途端に断られてしまうことも
ありました。

あなたにとって中野とはど
んな街ですか。

これから引越してしま
うけれど、大人になったら
戻ってきたい街です。



Profile

Kim Miero さん
(韓国出身)
明治大学国際日本学部 4年

中野のまちで生まれ、 まちで鳴らすナカナカノバンド。 メンバーのお二人に聞いた、 はじまりのまち中野への想い。

皆

さんお仕事をされながら活動しているそうですが、どんなきっかけでバンドが始まったのでしょうか？

— 森さん 本当初に最初の最初は、佐藤さんと出会った前職場でのクリスマスパーティーの出し物として集めたバンドだったんです。そこから何度か社内で行っていたら、中野の南口ロータリーでお祭りの前夜祭ステージに出ることになりました。私と佐藤さん、お互いに相方がいたので、4人のバンドで活動し始めましたね。そして、「中野にぎわいフェスタ」が始まり、出演が決まったんです。

— 佐藤さん バンドとして頑張ろう！と言って続いってきたというより、にぎわいフェスタにでることで続いってきたバンドだと思っています。中野の街中で演奏

していることで、中野のお客さんが聴いてくださって、他のイベントや社内のイベントに呼んでもらえたりと、どんどん繋がっていききました。3月11日の震災の後も、中野から被災地へと動く団体さんに伴って、現地をライブをしたりしました。その時から、バンドのカラーも良い意味で変わったのかもしれない。

— 森さん あと、私たちはにぎわいフェスタで裏方の仕事もしているので、他の出演者から「中野はいい街だね」と言ってもらえるのがすごく嬉しいんですよ。

— 佐藤さん 街でライブすることで、より地域と近いバンドという温かさを感じられますし、つながりも生まれていったんですね。
— 森さん 中野には、駅前の

ロータリーやセントラルパークなど、街の中で演奏できるスペースがあつて、そこに私たちがフィットしたのだと思います。そういうハード面でも助けてもらいましたし、チャレンジしやすい雰囲気があるのもキーンだと思いますね。それに、普通の会社員をしていたら絶対出会えないような面白い人たちに、

中野では出会うことができるんです。そういう部分が、私たちの背中を押してくれたんでしょうね。

— 佐藤さん そうですね。それに、中野にはフタがないと感じます。限界をつくらない。私たちのミュージックビデオは、商店街で撮影しているんです。そういうことができるもの、中

野だからと思いますよ。森さんも言うように、熱い思いを持つ人たちとコミュニケーションを取っているうちに、不思議と私たちがもつという気持ちになっっていくんです。中野は地元ではありませんが、今はほとんど地元のように感じます。こういう風に、中野の街への想いは繋がれていくのかもしれないね。

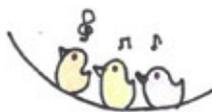
— 聴いているとワクワクしてしまうような音楽を中野のまちに届けているみなさん。お忙しい中ありがとうございます！

「熱い思いを持つ人たちとコミュニケーションを取っているうちに、不思議と私たちもそういう気持ちになっていくんです。」



Profile

森香菜子さん
(株式会社ヌリーズ / 中野区観光協会)
佐藤美和さん
(株式会社ヌリーズ / 中野区観光協会)





Profile

小林瑞恵さん
社会福祉法人 愛成会・副理事長・
アートディレクター

障害のある人も、あなたも、私も、どうやったらこの社会で活かし合うことができるのだろう。



今 回インタビューに向かったのは、1945年設立

の社会福祉法人「愛成会」。「人はみんな、自分の人生の主人公」という理念を掲げて、障害者の方の支援や、障害のある方が生きやすい社会づくりをすすめています。様々な事業の中でも、アールブリュットという芸術文化を通して、社会に対して、多様性を受け入れることの大切さを伝えるお仕事をしています。しやる小林さんに、お話をうかがいました。

まずはじめに、アール・ブ

リュットとは、どういうものなのでしょう？

アール・ブリュットという言葉は、フランスの画家であるジャン・デュビュッフェさんが生み出した言葉で、フランス語で芸術という言葉と、「生のまま、無垢なまま」という意味の言葉を組み合わせで作られた言葉です。日本語では「生の芸術」と訳されたりもしています。どんなものをアールブリュットというかという点、「加工されていない生の芸術、伝統や流行、教育などに左右されず自身の内

側から湧きあがる衝動のままに表現した芸術である」とされています。ジャン・デュビュッフェさんが生きた時代、高尚なものだとされていたアートをいう概念を、もっと誰もが参加できる日常のものと捉え直したのです。

またジャン・デュビュッフェさんはアール・ブリュットという言葉を使うことによって、これまで社会の中で「他と違う何か」としか認識されていなかったようなアール・ブリュットの存在を、認識可能な存在に

しました。私たちは、名前が無いものを認識するのは難しい。名前をつけることによって社会はアール・ブリュットの存在を知り、興味を持つきっかけになったんです。障害を持つ人や芸術教育を受けていない人の作品に触れてもらうことで、「人の多様性と可能性」を感じてほしいという、ジャン・デュビュッフェさんの願いを感じますね。

アール・ブリュットは、障害を持つ人の芸術という枠にとどまらないですね。だれもが参加できる芸術だと。小林さんは、日本でアール・ブリュットを通してどのような活動をされているのですか？

私がやっていることもジャン・デュビュッフェさんの精神に従って、アール・ブリュットを通じて「人の多様性と可能性」を発信していきたいと思っています。例えば中野駅周辺の商店街では毎年、アール・ブリュットの作品を展示するイベントを開催しています。中野には美術館がないので、アートを展示するスペースがなくて困っていたところ、商店街の皆

さんから「街全体を美術館にしてみえばいいよ！」という素晴らしいアイデアをいただきました。まさに商店街こそ、多様な人たちが行き交う日常の場面です。その日常の中でアール・ブリュットの作品と出会い、自分の知らなかった生き方をしている人を感じる、そういう瞬間を創りたいと思っています。

私たちは年をとるにつれて、自分の興味や行動範囲の幅が狭くなり、知っている世界が限られてきますよね。そういう中で「他者」を知り、人の多様性と可能性を感じるきっかけになるのが、アール・ブリュットなどの芸術文化なのだと思っています。

芸術文化は、まち全体への影響も大きいのでしょうか？

私は、芸術こそ人を結ぶプラットフォームになると思っています。ですから、芸術文化が無い街には、人の豊かさが育まれるのも難しいと思います。芸術は、資本的な価値ではなく、人の本質的な幸福感や心の様子などを目に見えるものにして、人々が本質を考えるきっかけに

なるものです。芸術には多様な表現があり、作品も一つ一つ個性的ですよ。市民の文化度を上げるということは、多様な価値観や生き方に出会うきっかけを多く持つということであり、その社会の器の大きさに関わってくると思います。

フランスの都市・ナントは、まさに芸術文化によって育まれた街です。市民は芸術に触れることで自分の学びや豊かさが増していくことを楽しんでいて、その様子を見てみると、文化が街に溶け込んでいるのだなと感じますね。アートは他者を排除しませんし、それを楽しむ人もまた、他の人を排除しない。そういう循環が生まれているのではないのでしょうか。

アートを通じたまちづくりの可能性を感じますね。

— そうですね。まず、アール・

「人の多様性と可能性」を感じざるきっかけになるのが、アール・ブリュットなどの芸術文化なのだと思います。

ブリュットなどの芸術文化に触れることで、どんな人が世の中にいるのかを知ることが大切ですね。結局のところ、人は個性が異なります。それぞれ個性を活かし合いながら、どんな人でも活かされるような社会にしていかなければ、個人の力を直すということは、時間も労力もかかるように見えますが、みんなが少し思いを馳せれば可能になると思います。厳格な規格をつくって人を困らせないのではなく、世の中にいる多様な人々を知って、少しでも多くの人々が活躍できるようにしていければいいですね。そのために、多くの価値観と触れることができる芸術文化というものを、広めていきたいと思っています。学生さんでも是非、一緒にやりましょう！

Episode* 21

「人生には二つしかない。 かっこいいか、 かっこ悪いかだ」

東

中野から南へ数分、今まで出会ったことのない深い雰囲気を感じているお店に出会います。今回私は、「リズ」でママさんとしてお店を切り盛りする小林初枝さんにお会いしてきました。

— もともと、このお店は違う方がやっていて、継ぐことになったと聞きましたが、どんなきっかけがあったのですか？

— 私はもともと女優の端くれをやっていた、小林悟監督の映



Profile

小林初枝さん
東中野・リズのママさん

画に出ていることからこのお店に足を運ぶことになりました。しかしその後は一度福岡の実家に戻っていて、ふとした時に監督に電話をしたんです。その時監督は奥様を亡くされて途方に暮れている最中で、「リズを継がないか」と頼まれました。それまで一度もスナックで働いた経験がなかったのに迷いましたけれど、行くしかないと思いました。これは、「勤」というもので、私の中では「偶然」ではなくて日頃から鍛えていた「勤」が導いてくれたのだと思っています。それまでも東京で一人暮らしをしたり、厳しい芸能界で生きてきたので、「これだ」というタイミングがわかるようになっていたんだと思います。常日頃から感性を磨くことは、大切なことです。

— 運命を自分の手で切り開いてきたというのが伝わります。

— 私の尊敬するお師匠さんの言葉で、「人生には二つしかない。かっこいいか、かっこ悪いかだ」というのがあって、私にとっては座右の銘なんです。日本は、都合の悪いことには蓋を

して見て見ぬふりをしたり、本当は声をあげたい弱い人が声をあげられない社会になってきていると感じます。そういうものを見る時、かつこ悪いなと思います。もっともつと視野を広げて、歴史や物事の背景を考えて行動していったほうがいいと思っていますよ。実は、通信の大学に通って法律を勉強していて、まだまだやりたことはたくさんあるんです。

本当に声を上げなければならぬ人に出会う機会が少ないので、想像力を働かせる必要を感じますね。

— そうです。日本は、どうしたって敗戦国だというバックグラウンドを持っている国なので、ここまで立て直してきたという自負とプライドを持っていると思います。その中で、今世界で起きている問題や、日本の中にある既得権益がらみの問題をどう解決していくかが問われますね。「もう嫌だ!」と言ってしまふのは簡単ですが、まず現状を理解して、一步一步できることからやっていく必要があると思います。中野も、もっともつと外

ママのあり方が「リズム」をつくる。
お店に漂う雰囲気は、激動の人生を送ってきたママがつくりあげてきたものでした。

に扉を開いて、新しい風を入れていかないといけないと感じています。つながりが強いということ、閉じたコミュニティになってしまうことは諸刃の剣です。外からきている人たちが多いのだから、架け橋的な存在となつて、街の中で活動してみたいと思いますよ。

ママの言葉から、嘘をつかず生きてきた生き様を感じました。ありがとうございます。

Episode*22

中野は古い故郷のような 雰囲気の街です。 友達を連れてきたくなる街ですね。 中野の多国籍料理店を支える BM HALAL FOOD



Profile

バイアン エムディ フクルルさん
(バングラデシュ出身)
BM HALAL FOOD オーナー

中野や高円寺の飲食店が食材を仕入れる『BM HALAL FOOD』は中野駅北口からほど近くにありまふ。店名にある『ハラルフード』はイスラム教における『食べてもよい食品』のことを指します。いつ頃からお店をやられているのでしょうか。

— 6年前に中野に来ました。中野には外国人がたくさんいますが、外国の食材のお店がなかったのでこの店を作ることになりました。中野に来る前は池袋に住んでいて、同じ食料品店を3店舗やっています。

日本にはいつ頃来られたので

しょう。日本には2002年から住んでいます。最初は日本語学校の学生として来日しました。そして貿易の専門学校に行つて、自分の会社を始めました。食料品店のほか自動車販売もしています。

お店のお客さんはどんな方が多いですか。

— 外国人だけではなく日本人の方も来ますね。売っているものはアジア系の食材が多いです。インドやネパール料理のお店の方は材料をすべてうちで買ってきています。中野から高円寺までのインド料理屋さんみんなお客さんです。

— ここでお店を始められて、中野という街の変化は感じますか。

— 6年で変わりましたが、駅もお店も変わりました。セントラルパークや大学ができて、人の賑わいも増えましたね。この6年間の変化は良いものだと思っています。

— 中野の好きな場所はありますか。

— 家族でセントラルパークに

Episode* 23

遊びに行きますね。よくイベントをやっている、お店がたくさん出て人もたくさんいますね。中野に多様性はあると思いますか。

— 多様性はあると思いますね。中野は古い故郷のような雰囲気のある街です。他の場所では見たことがありません。友達を連れてきたくなる街ですね。綺麗なお店はいろいろなところにありますが、中野のような雰囲気のお店はないと思います。小さくて人がたくさんいますよね。夜の2時、3時でも立ち飲みで飲んでいる人もいますしね。

中野でご飯を食べに行くことはありますか。

— ありますね。カレー屋さん、定食屋さん、てんぷら屋さんに行きますね。家族で新井一丁目に住んでいて一緒によく行きます。この前まであった店が変わっていることがあって、中野のお店がどんどん変わっていることを感じます。

突撃インタビューにも関わらず、お仕事の合間に応じてくださいました。ありがとうございました。

多様な人が、地域の中でつながりを持って中野へ。
不安と孤立をなくすべく6年間
中野区議員を務めてきた、
石坂さんの描く中野の未来。



Profile
石坂わたるさん
中野区 区議会議員

中野は、その胃袋の大きさが魅力です。排除する前に取り込んで、ちゃんと消化していると思います。

現

在は多様な人たちが暮らしやすいまちを目指し議員さんとして働かれている石坂さんですが、前職では養護学校の教員をされていたそうです。どんなきっかけで議員を目指されたのでしょうか。

— 教員時代は、私立校で質の高い教育をやっていました。し

かし、資金の問題や人手不足で、現場で頑張ってもなかなか状況は変わらないなと思いました。また、私自身がLGBTのゲイの当事者であることもあって、選挙の時に候補者にアンケート調査をし、その情報をHPで流したりしていたんです。それでも、やれることの限界を感じて、顔が出せる人が出した方がいいと思って、立候補しました。現在6年目ですね。無所属の議員として活動しているんで、できることは限られますが、他の政党が気付いていないところを真面目に取り上げていくと、大きな政党にも動いてもらえることもあるんですよ。なので、区民の目線に立ってコツコツとしっかり課題を挙げてゆくことをしています。

議員さんとして、どんなことを大切にして活動されているのですか？

— 区民の声を聞くことですね。やはり、自分のバックグラウンドだけでは物事は動かなく、実際に困っている区民がいるということが重要です。茶話会を開いたり、さまざまなイベ

ントに参加をしたりして、直接お話しをしています。中野は、歴史的に見ても多様な人を受け入れるような文化がありますが、それでも不安を感じたり孤立をしたりしている人がいるのも事実です。思い切ったつながれば繋がれるはずのだけれど、その一歩に対して不安に思ってしまうこととか、信頼して一歩を踏み出すことが難しい人もいるんだと思います。そういう人が、それぞれの属性を尊重しつつ、一緒にやっていける地域を作りたいですね。

多様な人たちがいる中野のまちでも、まだまだ改善している部分はあるのですか？

— 制度面でいうと、現実にごう合わせていくかが課題だと思います。例えば、LGBTの人の住まいを探す権利や制度を整えるべきだと思います。中野区は、民間事業者と組んで支援が必要な人が住まいを探しやすいように制度を作り始めています。しかし、制度の面ではまだ改善が必要な部分があります。LGBTの人たちへの住居問題に関しても、区だけでは

なかなか進めないところが、民間の方と一緒にやると進む面もあります。なお、中野区は学生やご年配の方が多く、ファミリー層が少ないため、住民税が入ってきにくい人口ピラミッドになっていてるので、税収が少なく、区の予算だけで出来ることはなかなか少ないのが現状です。なので、様々な取り組みについて住民の方にたくさん協力していただいています。そこには住民の声が反映されやすい反面、区行政が皆さんに丸投げしてしまうようなこともあるというプラスマイナス両面があります。マイナス面は改善していきたいですね。

中野で活動する上で、キーワードはどういうところでしょうか？

中野は、その胃袋の大きさが魅力です。排除する前に取り込んで、ちゃんと消化していると思います。本当に、地域に入っていくといういるな人たちと知り合えますよね。学生さんには、そういう中に思い切って飛び込んでもらえるといいのかなと思います。

パステルシャインアートやおもちゃを手段とした アクティビティ・ケアやセラピーなど、 高齢者や学生の「場づくり」を支援する大隅さん。 人を惹きつける「場づくり」に必要なことは。



Profile

大隅涼子さま
パステルシャインアート
おもいえさん主宰
認定 NPO 法人芸術と遊び創造協会
NPO 法人現代文化振興会

大

隅さんとの出会いは、つながる中野のミーティングでした。東京おもちゃ美術館を運営している NPO で人材育成のお仕事、デイサービスでのお仕事、さらに大学でのお仕事と幅広く活躍されている大隅さんに、人が集まる場づくりについて伺いました。

まずはじめに、中野地域でどのような活動をされているのか教えてくださいませんか？

私が地域で行っている活動のひとつは、デイサービスや障害者施設などケアが必要な方々の集まる場でパステルアートを手段としたセラピーやアクティビティ・ケアをすることです。パステルという絵を描く道具を使って、お年寄りの方々と一緒にその日のテーマにそった絵を

描くのです。パステルはだれでも簡単に素敵な絵を描くことができるので、ご年配の方も楽しんでもらえるんですよ。お花を描いたり、季節にあったものを描いたり簡単なものを描くのですが、みなさん本当に個性的な作品をつくれます。描いているとき、とりとめのないようなことから悩み事、心に抱えている気持ちなどがお年寄りから溢れてくるので、私はそれを丁寧に受け止めるようにしています。絵を描く過程や出来上がった絵に、それぞれの状態や心の中が現れてくる。私はそれを否定したり押し付けたりせず、本人と一緒にその気持ちと向き合う時間を大切にしています。

また、絵を描く過程に指運動を取り入れたり、回想したり、その方の様子を観察して、介護士さんと情報交換をすることで支援にも役立つようなくみになっています。ひとりひとりと向き合うことは時間がかかることではありますが、楽しんでく

大切なことは、何を軸に人を集めるかを明確にすることです。どんなコンセプト、どんな想いがあるのか、そこが一番の軸となります。

ださっている姿や素敵な絵を描かれている姿を見ることができるので、やりがいを感じています。

お年寄りの皆さんが絵を描かれているお写真を拝見しましたが、皆さん本当に生き生きとしている雰囲気伝わってきますし、個性豊かな絵が素敵ですね。他にはどのような活動をされているのですか？

もう一つ地域に関連した活動ですと、大学のゼミで学生主体の「地域で場づくりや関わり」を支援しています。学年によって活動は変わりますが、地域のマップを作ったり、1日カフェを開いたりしています。それらの「場づくり」を、様々な視点からアドバイスするのが私の役割です。コンセプトや企画の概要を決めるところから、当日の運営に至るまで、人を集める場づくりに必要なステップはたくさんあります。それらに伴走して、学生たちの学びを助けています。

中野から日本を潤すキリン。 ～わずか5年、深く繋がった 大企業と地域～



Profile
中井さま
キリン株式会社

中

野セントラルパークサウスに本社を構えるキリングループです。キリングループが中野にやってきて5年、地域と企業の関わりを大事にする中井さんの想いを聞きました。

では、まず本社の移転先の中野を選んだのはなぜなのでしょうか
 ー 都内にあったグループ各社の本社機能を統合できることを探した結果、中野に移転することになりました。中野は社員にもなじみが薄く、中にはなぜ中野?という気持ちを持った社員もいたと思います。
 そこで、中野で最初に取り組まれたことはありますか。
 ー 中野の居酒屋を巡り、そのオーナーやお客さんと仲良くなってキリングループの地盤を

作るうとしました。その甲斐もあって、当時と比べると今では中野の大多数の居酒屋でキリングループの商品を飲むことができるとは思います。

地域との交流を大切にしようという想いがあるんですね。

ー そうですね、閉鎖的ではないかと思っておりますので。仕事上だとどうしても交流が薄くなってしまいます。そこで、本社は食堂を設けず昼食を外でとるようにしたり、中野の経済団体などとの交流を本社で行ったりするなど、中野の皆さんと接点を増やそうとしています。(※)なるべく継続的に交流できる形がいいですね。

私たちのような学生との関わりはどうですか。

ー おもしろいですね。学生とのタイアップ、もちろんOKです。中野のエリアマネジメントのひとつとして、教授とだけでなく学生とも連携したいと思っています。

山脇ゼミの3年生(8期生)は、来年度の活動として「中野のために」ということを念頭にしています。なにかアドバイス

はいただけませんか。

ー 「中野のため」というと、どうしても上から目線に聞こえてしまいますね。自分たちが動くことが、結果的に中野のためになるという発想でもいいのではないのでしょうか。

「中野のため」よりも「中野で」ということですね。

ー 例えば町会の神輿を担いでみたり、中野の歴史を掘り起こして図書館に情報コーナーをつくらたりするのはどうでしょう。私が出会った、中野にある打越酒場という居酒屋さんは、昔この辺の地域が打越町という町名で、そこに由来して名前をつけているのだと教えていただきました。このように、中野の人たちと実際に出会っていくと、何か発見があるかもしれないですね。中野の街を受け継いでいく、という意識がいいと思います。それが何になるかはわからないけれど、可能性は無限にあると思いますよ。

実際にキリンも中野で様々な

「はじめは中野は社員になじみが薄く、なかに
なぜ中野?という社員もいたと思います」

ことをされていますね。

ー 現時点でキリン単体で動いている活動というよりは、地域で行われるイベントに協賛として関わらせていただく機会が多いです。みなさんのイベントを応援することもできますし、企業として売り上げを上げることでもできるので、積極的に関わっていますよ。

日本有数の大企業でありながら、本社周辺の地域や大学との関わりを真摯に考えられているように感じました。今後の活動についてもアドバイスを頂き、非常に楽しいお話になりました。なぜ中野?だったところから、地域の人と出会うと可能性は無限大だということまで変化を遂げた、この5年間のキリンさんの活動は、大変勉強になります。

ありがとうございました。

好きすぎて野方に住んじやった! 大学生活中から中野の街と関わっていた白井さんに 聞く、街に一步踏み出す魅力と可能性。



Profile

白井愛菜さん
明治大学卒業生 / IT系企業会社員
在学時は国際交流学生委員会や
「なかのフィルム」として活動されていた。

明 治大学の先輩であり、「なかのフィルム」という企画を大成功させた白井さんへのインタビューは、旅をテーマにした野方のレストランにて。

国際交流学生委員会（以下、委員会）に所属されていた白井さんですが、委員会の活動はまちとの関わりが強かったのですか？

ー いえ、最初に委員会が中野の地域と関わったのは2013年に行った中野区国際交流協会（以下ANIC）の中学生国際交流事業のお手伝いです。大学事務室から声をかけてもらって、ニュージラードから来た中学生の子どもたちとの交流イベントを企画することになりました。このイベントをきっかけに、明治大学の国際

交流学生委員会が中野地域とのつながりを持つことになったと思います。また、履修していた講義で企画した「なかの多文化共生フォーラム」での提言に、地元小学校の校長先生が賛同してくれて、3ヶ月で提言が実現しました。このスピード感は、中野の街の方々が密に繋がっていて、若い人の声にもきちんと耳

を傾けてくれる雰囲気があるからこそ生まれるのだからと思いますね。この経験があつてから、中野の街でもっと活動してみたい!と思いました。

そんな経験をされたんですね。今回のインタビュー企画、実は「なかのフィルム」に大きくインスパイアされているんです。企画をやってみて、どんなことを思いましたか？

ー 中野のまちは、とにかくあたたかい!と感じました。どこか片田舎のようなアットホーム感があり、東京23区とは思えないくらいです笑。「なかのフィルム」はそのあたたかさによってできた作品でしたね。みなさん、本当に快く写真を撮ったり次の方を紹介してください!たりして、どんだん人の輪が広がりました。

野方の街にはなかのフィルムの取材ではじめて訪れ、個人店が駅前にはぎぎと立ち並び活気ある商店街に衝撃を受けました。「個人店が並び商店街IIシャッター街」というイメージを漠然ともっていたがシャッターなど

ほとんどなく、むしろ元気な個人店がいっぱいですよね!個人のお店が元気になっているということは、それだけ街の人たちがその人たちを応援しているというところで、この街は面白そうだなと感じたんです。そういう経験から、取材をした時からずっと野方に住みたいと思っていました。一人暮らしということもあり、せっかくなら近所に知り合いがいるような生活がしたい。野方の方々なら頼もしいし楽しくてあたたかい人たちがなので、ご近所付き合いしたい!とも思えましたね。

街とそこに住む方々と出会って、好きになって、実際に住んでしまおう!白井さんの行動力!素敵です。実際に住んでみて、野方ライフはどうですか？

ー 元氣な商店街を毎日通り、個性あふれるお店に通うのが日々の楽しみで、どんだん野方への愛が増えています!笑。野方の街に住んでから、他の街の見え方も変わって、シャッター街なかどうかなど、意識するようになりました。もし自分が将来野方を離れることがあると

しても、その住んだまちの商店街を元気にするために、何か自分にもできることをやりたいな、と思えるようになりましね。

それに、野方のように活気ある街も、その活気を維持するのに大変な努力をされていることを商店街の方のお話を聞いて実感しているので、地元民としてお店にまめに通って少しでも売上の足しになったらという思いも強くなりました。

今だからこそ、学生に伝えたいことはありますか？

「何か少しでもやりたいことがあったら自信をもって、ためらわず、一歩踏み出してみてください！きっと、気が付いたら実現しています。そういう体験ができるのは、中野キャンパスにいる特権ですよ。中野のみなさんは、学生が「まちに出て、こんなことをしたい！」という想いにとても好意的です。私も最初は「こんな若者の、こんな学生の言うことなんて大人は聞かないよな」と自信がなかったのですが、中野のみなさんの反応はむしろ逆で、とてもウエル

カムでした。

4年生になってからだとすぐに卒業になってしまふので、2年生の時から街に出て行くことを、強くお勧めします！

素敵なエピソードと美味しいうどんで、お腹も心もいっぱいになりました。ありがとうございました！

「何か少しでもやりたいことがあったら自信もって、ためらわず、一歩踏み出してみてください！きっと、気が付いたら実現しています。そういう体験ができるのは、中野キャンパスにいる特権ですよ。」

Episode* 27

自動車整備士を目指す ベトナム出身のフオックさんに 話を聞きました。



Profile

Nguyen Xuan Phuocさん
(ベトナム出身)
専門学校生 中野在住

フ オックさんは専門学校で学びながら、アルバイト

に励む毎日を送っています。これまでファミレス、ラーメン屋さん、定食屋さん、宅急便、コンビニなどでアルバイトを経験してきたそうです。

いつ頃中野に来られたのでしょうか。

「2015年の10月に来ました。ベトナムで通っていた学校の紹介で中野に来ました。姉と一緒に中野で暮らしています。日本語学校も専門学校も中野にあるんです。専門学校では自動車について学んでいて、整備士を目指しています。日本で

就職したいです！

中野の好きなところはどこですか。

「家賃が安いこと、特急が止まって交通の便が良いところが好きです。あとは中野には賑やかなところも静かなところもあるのが好きですね。」

ご出身はベトナムのどちらですか。

「ホーチミン出身です。ホーチミンには日本の会社がたくさんあります。日本からの旅行者も多いですね。昨年の夏休みに帰った時には初めて高島屋を見ました。」

高島屋も進出しているのですね。ホーチミンと東京の違いはなんですか。

「東京は街中にゴミがなくて綺麗ですね。あとホーチミンの方が暑いです。ホーチミンは乾季と雨季しかないんです。日本には四季がありますよね。桜や紅葉を初めて見たときは興奮して、写真をたくさん撮りました。夏には花火大会に行ったことがあります。楽しかったです。」

今後、日本でやってみたくことはありますか？

— 全ての都道府県に行ってみ
たいです！各地の特産物を食べ
たいですね。

最後に、フオックさんの夢は
なんですか。

— 日本国内だけでなく、海外
も含めて色々なところに旅行す
ることですかね。次に行ってみ
たいのは韓国です。日本から韓
国へ行くときはビザがもらい
やすいからです。韓国の友達に
会ったり、美味しいものを食べ
たりしたいです！

中野には
賑やかなところ
も静かなところ
もあるのが
好きですね。

Episode* 28

やってみないとわからない、
だからやってみよう。

中野の夏の風物詩『チャンプ
ルーフェスタ』を生んだ

長谷部さんの、
人を想う居場所づくりの軌跡。



Profile

長谷部智明さま
昭和新道商店街・商店会長
有限会社中国菜館 明白 代表取締役

長

谷部さんは、中野の人気
店「パニパニ」と「とり
☆パニ」を運営する傍ら、中野
北口昭和新道商店会長、また中
野チャンプルーフェスタを運営
されています。たくさんお聞き
したいのですが、まず、ま
ず最初にお店の原点からお聞か
せください。

— 僕は大学へは行かず劇団の
研究生になりそのまま舞台俳優
の道を目指していました。時々
テレビやラジオのお仕事もいた
だいていました。祖父の代から
父へと受け継がれていた中華料
理店「ミンパイ」というお店は
継ぐつもりはなく、芝居を続け
ていましたね。そんな中、突然
父が若くして脳卒中で倒れてし
まい、第二人がまだ中学生だっ
たこともあり、一度も鍋を振
るったこともない私がお店を継
ぐことになったんです。一度は
売り上げが落ち込んだ時もあり
ましたが、自分ができるメ
ニューだけに絞ったりと工夫し
たら、3ヶ月で売り上げは戻
り、そのまた3ヶ月後には1.5倍
の売り上げを得るほど繁盛しま
した。おかげで、役者に戻るタ

イミングは逃しませんでした
がね笑。そこから、宅配ピザスタ
イルの中華のデリバリーなど新
しいことをしていきました。

— ここ昭和新道商店街は、一昔
前まで夜に女性が一人で歩くの
はよろしくないような雰囲気で
した。でも、せっかく利便性も
いい中野に住んでくれている人
がいるのだから、地域とのつな
がりを持つような健全で明る
い雰囲気のお店をつくりたいと
思いました。女性が一人で入る
ようなお店はあまりなかったの
で、「入りやすい、帰りやすい」
カウンターで立ち飲みスタイル
という新しい形にも挑戦して、
昭和新道商店街に新しい風を運
ぼうと、このお店ができたので
すよ。

— 中野のまちに住む女性への思
いやりから始まったのですね。
中野の商店街という場、チャン
プルーフェスタの盛り上がりが
思い浮かびます。どのような
きっかけで始まったイベントな
のですか？

— 中野っ子である僕にとっ
て、阿佐ヶ谷や高円寺には50年
以上続くシンボリックなお祭り

「一度やつてみようとなった時、エィサーのロックなサウンドがピタッと来て、これだ！と思いましたね笑。」

があるのに、中野にはないのが悔しかったんです笑。ルーツのないお祭りをやりたくもないし、と悩んでいた時に、ちょうどエイサーの団体の中で若手中心の改革が始まり、一般のお客さんに広く楽しんでもらえるようなエイサーをやりたいという企画をもらいました。一度やつてみようとなった時、エイサーのロックなサウンドがピタッと来て、「これだ！」と思いましたが、踊り手も若いイケメンの濃い顔男子が多く、女性の反応がすごかった！時代の流れとしても、沖縄ムーブメントが来ていて、島唄やオレンジレンジが流行っていたので、追い風になると感じていました。今年で14年目になりますが、今では夏になると「中野のチャンプルーフェスタ」と言ってもらえる

るので、嬉しいです。

長谷部さんの先見の目、やってみるという心、素敵です！

私は中野に育ててもらいましたし、私の子もまた中野に育ててもらっています。この年になってできることは、街でマイノリティとなっている人に居場所をつくることくらいじゃないかと思っていますからね。中野は、土地高い、家賃高い、でも貧乏くさいというイメージがあります。それも中野らしい部分でもあるし、サンプラザのような象徴もある、そんな町でこれからたくさんの方がつながるような場所をつくってあげたらいいなと思っています。学生さんも、早く出会えればたくさん一緒に何かできるので、ぜひ会いましょう！



高校の頃から日本語を学んできたタイ出身の Pariyada さん。

卒業後は、日本で通訳の仕事に就くという Pariyada さんに話を聞きました。

「日本に来た経緯を教えてください。」
高校3年間で日本語を専攻してしました。大学に入学する前にたまたま奨学金をもらうことができて、日本に来ることを決めました。奨学金は海外で勉強するためのもので留学先を選ぶことができたんです。おばさんが日本に住んでいて以前から少し話を聞いていて日本に興味がありまし

た。この留学が初めての海外でしたね。

「国際日本学部を選んだ理由は何かありますか。」

色んな種類の授業があつて留学生が多いと思つたからです。実際に入学してみてもイメージ通りでしたね。自分が勉強したい授業が選べるのが良いです。

「中野に通うようになって4年目です。中野の好きなところはどこでしょう。」

新宿から近くて便利なのところ。あとは大学の前のセントラルパークが好きですね。家族連れの方が遊んでいるのを見るのが好きなんです。フードトラックでよくお昼ご飯を買います。お肉系のものがお気に入りです！

「日本が初めての海外とのことでしたが、来た当初の印象はどうでしたか。」

大学に入る前に通っていた日本語学校は、御徒町にありました。まず電車にいる人が多いなと思いましたが、私はチェンマイの近くの出身で周りが田んぼで囲まれているようなところで育ちました。それと比べるとタイより日本の

方が交通機関は便利で、タイ人より日本人のほうが真面目だなと思いました。

「これまで日本で暮らしてきて、多様性を感じることはありますか。」

そうですね。住んでいるわらび(埼玉県)のシェアハウスには色んな人がいます。旅行者や留学生、日本人の方もいます。みんなでご飯作ったり、パーティーをしたりしますね。地域の行事でお神輿を担いだことや運動会に出たこともあります。

「あなたにとって中野はどんな街ですか。」

きれいな街です。中野は料理屋さんがたくさんあつて、セントラルパークには緑があつて綺麗ですね。



Profile
Pariyada Arbkoosong さん
(タイ出身)
明治大学国際日本学部 4年

『おためしっくすマガジン』 編集部・藤井さんの生き方 から学ぶ、 これからを生きる世代とし て今、すべきこと。



Profile

藤井聡さん
株式会社 エフ・スタッフルーム
まちおこしプロデューサー

毎

号様々なジャンルの「中野のお試し」を紹介するマガジン『おためしっくす』を創刊している藤井さんは、CMプロダクションの世界や中国とのビジネスを経験、そして今の会社に入られます。その間、心筋梗塞で生死をさまよう経験をしながらも、一瞬一瞬に全力をかけて生きている藤井さんの姿から、私達の世代が学ぶべきことが見えてきました。

まずは、CMプロダクションの世界から今の「まちづくりプロデューサー」となるまでのお話を聞いてみました。

「私がCMをつくる仕事をしていたのは、日本が熟成期〜バブル期の頃、いい意味でやりたい事が何でもできた時代でした。ぶっ飛んだ経験もたくさんさせてもらいましたね笑。私はこの頃から、「一人一人を大切にしているプロジェクトを進めていく旗振り役」というのが好きだったんでしょう。みんな、やるぞー！って言って物事を前に進めていくのは本当にやりがいを感じます。それは、CMづくりでもまちづくりでも変わ

らないことです。誰一人欠けてはいけないピースだから、一緒に創り上げていきたいと思っています。

時代は変わりバブルも崩壊した後、色々な経緯がありながら今の会社、エフ・スタッフルームに入り、新規事業のフリーペーパー「中野のタウン誌『おこのみっくす』」のスタッフとして参加しました。まずは、中野のまちを知るために、中野区全区、隅から隅まで歩き巡り、自分の肌で感じるマーケティングを実践しながら、中野のまちのお店をとにかく訪ねて歩きました

ね。お店の店主たちに対し、疑問を思ったことは、「どうしてこうなっているの？」とズバリ本音で話そうに心がけていたもので、今でも腹を割って話すことができる関係を築いていると感じます。そして、より頑張っているお店と消費者をつなげる雑誌「おためしっくす」をつく

るようになったんです。

業界こそ変わっても、藤井さんは「人の心を大切にすることをコミュニケーション」をつくってきたのです。・まちおこしプロデューサーとして、どんなことを意識しているのですか？

「私たちは第三者的な役回りなので、まちの状況を俯瞰しながら、いいことも改善できる部分もしっかりと押さえていきたいと思っています。中野のまちには良いところがたくさんありますが、見て見ぬふりをしている部分や上っ面だけを眺めてしまっている部分もあります。「カオス」で「多様性を受け入れる」街・中野と謳っていても、現実には保守的な雰囲気や文化を送らせてしまっているかもしれません。そういう現実を受け入れ、じゃあ何が今できるのかを考えていく人材が必要とさ

「失敗することこそに意味があり、無駄なこととは何一つないと信じて、自分の夢に全力でぶつかっていきましょう。」

れています。

本当の意味で良い街にするためには、リアルな状況を受け止め、一人一人が中野のまちのことを「自分ごと」として考えて日々行動したり発信したりすることがまず一歩です。そのため私は、つながる中野や他のコミュニティでも、客観的な視点を忘れずにまちと関わっていくように意識しています。

中野のまちが本当の意味で「良いまち」となるようにするには、まだまだできることがあるのです。病とも闘う経験をしてきた藤井さんから、いまの若い世代に伝えたいことはありますか？

— 学生さんに一番伝えたいことは、感性を磨きなさい、ということ。情報が簡単に手に入る時代、知ったかぶりをしてすべて経験したつもりになってはいけません。本当に意味のある情報、生きていく情報というのは、自分で経験をして初めて手に入るものです。コッコツと自分の足で現場に行き、自分の感性で受け止めること、そうして経験したものが、想像力と

Episode*30

創造力の土台になります。失敗することこそ意味があり、無駄なこととは何一つないと信じて、自分の夢に全力でぶつかっていきましょう。

一つ一つの藤井さんの言葉が、私の背中を優しく押しつけてくれました。本当に、ありがとうございます。



Profile

劇団おひさま冒険団さん
吉良竜矢さん（劇団団長）
たまゆり笑さん（制作担当）

中野のまちで、おひさまのような存在となれるように。応援してくれる中野の皆さんに、感謝の気持ちも日々の活動で還している『劇団おひさま冒険団』のお二人に聞く、中野地域人の想い。

劇

団おひさま冒険団は、東京中野に2013年11月9日に中野で生まれた劇団です。中野地域に根ざし、おひさまのように心温まる、冒険のようなくわくわくに溢れた感動を呼び覚ます劇団を目指している皆さん。今回は団長の吉良さんと、つながる中野でお会いした、たまさんに明治大学にお越しただきお話を伺いました！

劇団設立時から、地域密着の劇団だったのですか？

— 吉良さん そうですね。芸能界を目指し大阪から出て来た私は、ご縁があり中野に事務所を構えるプロダクションルートエフにお世話になる事になりました。その後、中野で地域密着をしながら活動する「おひさま冒険団」が立ち上がりました。劇団をやるということは、お客

さんに見てもらおうが必要なので、地域で活動することを通してお客さんを増やしていくということが大切なです。でもそれ以上に、地域で活動することで皆さんと関わり、成長させてもらっていることが大きいですね。私は大阪、京橋が地元なのですが、どこが雰囲気故郷に似ているところがありすぐに中野が好きになりました。

日々コツコツといるいるなところへ足を運んでいるのをFacebookなどで拝見していて、見習わなければいけない姿勢だなと感じておりました。中野で活動していく中で、感じることはありませんか？

ー たまさん 私は、入団するときにちょうど「地域密着型の劇団」として活動を始める時期だったので、初めは言われるがまま中野での活動をスタートしました。やっていたことは、商店街を一件一件まわってイベントのお願いをするというものでした。誰も知り合いのいない街での活動で、辛いこと嬉しいこと沢山経験させていただきました。門前払いもあり厳しいお言葉

葉を頂くこともよい経験でしたし、初めて会う方に温かい言葉をかけていただいたり、優しくされたりすると本当にうれしかったです。また、初めは厳しくても何度も足を運んでいるうちに皆さんと打ち解けることができるので、活動すればするほど、中野の人たちの温かさを感じていました。中野での活動を通して、人とのふれあい、関わるのがこんなにも楽しい事を教えてもらいましたね。

最後に、お二人からまちの皆さんへ一言いただきました！

ー 吉良さん これからも劇団を通じて、何か中野の皆様のお助けになればと思っております。まだまだ小さな力ではございますが皆様と共に中野を盛り上げていければと思っております。

たまさん 中野の地域密着の劇団として4年活動してきました。これまで温かく見守り、応援をさせていただいて感謝しております。これからも、感謝を忘れず、温かい中野の地で頑張つて参りますのでよろしくお願ひ致します。

Episode*31

視点を変えて、自分に身近な芸能としてのお能を楽しんでもらいたい。新しい「芸能の見方」を創造する、梅若幸子さんのルーツと生き方。



Profile

梅若幸子さん
Umewaka International
株式会社・代表取締役
下呂温泉湯之鳥館取締役
特定非営利法人日本伝統文化交流協会 理事

梅

若さんは、人間国宝である梅若玄祥さんの娘さんであり、ご自身はお能のプロモーションや温泉の経営などをされています。お能という日本文化に触れながら育つたルーツと、今やられているお仕事と、どんなつながりがあったのでしょうか。

ー 私は、社会人として電通でマーケティングの仕事やテレビ局での仕事をしていました。大学の時、学部で学んだ知識を生かしての仕事でした。伝統文化とは少し離れたマーケティングの世界に魅力を感じたのは、小さい時に訪れたドイツでの出来事がきっかけです。ドイツで、メッセというたぐさんのものが売られている場所に行き、マーケティングという概念を知りました。私は女性なので父の後を継ぐことはないということもあり、「お客さんの気持ちも出演する気持ちもわかる人として、何かできるのではないかと」とぼんやり思っていました。そして、大学卒業後に働いて思ったことは、その世界にはその世界の規則があること。どちらか

に入っていけば、その世界のことがよくわかるようになりま。でも私は、どちらの世界にも固定せず、双方のかけはしになることを結果的に選んでいると思います。どちらの世界のことも、100%わかってきたように話すことはありませんが、日本文化のことを企業の人にわかりやすく伝えることはできません。そういう意味でも、今までの学びは何一つ無駄になっていないなあと実感しますね。

なるほど、どちらも経験したりそばにいて感じたりしているからこそ、双方の通訳的な役割になれるのです。具体的に、企業の人にはどんな話をしていくのですか？

ー トークイベントや企業セミナーなど、行く場所や相手によって話す内容も話し方も変えています。私が一貫して意識していることは、「もの見方を考える、新しい価値軸を提供すること」です。お能の話は日常からかけ離れているような気がして実は、日々の仕事とリンクしている点は多いのです。

例えば、お能とプレゼンター

シヨン。表現や発表することは決まっているけれど、目の前の人は毎回変わるし、その目の前の人が納得してくれないと、意味がないという点では共通です。そういう意味で、プレゼンも能も一期一会。上手い人は、一回見た時に何か意識の中に引っかかるものを作れます。それと、正面だけではなくて横も意識しないといけないというのは、プレゼンと能の共通点です。こうやって、自分の身近に感じることと能を交えて話すと、みなさんの中で能を見る評価軸が生まれます。自分がプレゼンしている姿とリンクさせて考えてみるができますよね。

こういうきっかけで、もっと伝統芸能に興味が生まれて、日本文化は特別なもので非日常なんだけど、自分たちが日々やってるということとそこまで変わらない

日本文化は特別なもので非日常なんだけど、自分たちが日々やっていることとそこまで変わらないと思っと思っています。やっ
ていることは変わらな
いけど、形が違って古
くなっているだけで、
本質は変わらない。

と思っと思っています。やっ
ていることは変わら
ないけど、形が違って古
くなっているだけで、本
質は変わらない。そこ
を見せたいのが、私の
仕事です。

これから、中野のま
ちと梅若能楽堂さん
はどのように関わって
いけるのですか？

数年前から、中野のま
ちのつながりが増えま
した。徐々に、梅若能
楽堂という存在や、そ
こで行なわれている公
演などを知ってもらえ
るようになってきました。
先日は、明治大学の
小林副学長と一緒に「
お能×アールブリュット」
の企画をやりました
が、そういう融合をど
んどんやってみたいで
すね！学生のみなさん
も、国際日本と総合
数理など、学部の枠を
超えて融合してみたら
面白いと思っますよ。

Episode* 32

伝統文化をどう伝えていくか。 瀧田さんが斬新な切り口で伝統民踊を 発信する理由とは？



Profile

瀧田哲成さま
(鳳蝶美成さん)
鳳蝶流 家元師範

今 回お話を伺ったのは、鳳蝶（あげは）流家元師範

の瀧田さん。伝統文化の民踊を
やられている方と聞き少し身構
えていたのですが、瀧田さんは
穏やかで気さくな方でした。伝
統文化をどうやって続けていく
のか、いま最前線で活動されて
いる瀧田さんに伺いました。
まず、どのようなきっかけか
ら民踊の世界に入っついかれた
のですか？

小さい頃から、踊りの先生を
やっていた母の影響で太鼓と踊
りをやっっていました。サッカー
部や演劇部に入りながら民踊は
ずっと続けていて、大学では芸
術系の学部に入りました。最後
の卒業論文を書くにあたって、
日本の三大民踊の一つである郡
上踊りをテーマにしようと思

い、岐阜へ行っただです。そこでの踊りは、生演奏がバックにいてライブ感がすごかったり、周りの屋台や人の熱気があつたりして、その土地のパワーを感じました。その原体験から、地元のお祭りのことをもっと知りたいという思いや、何か還元できることはないかという気持ちが湧いてきました。東京へ戻ってお祭りを見てみると、会場には東京音頭を踊れない人がたくさんいるのに気がつき、YouTubeで踊り方を公開してみよう!と思いついたんです。その動画が100万回再生される大ヒットになったんですよ。

そうですね。日本の文化には、静と動の文化があり、動は大衆的な文化として残ってきた歴史があります。でも、今見ているとお神輿や盆踊りが民衆から離れてきていると感じる部分もあるんです。だからこそ私は、民踊の中でも、誰でも入りやすく街全体を元気にするエネルギーがあり、文化として根付いてきた盆踊りに大きな可能性を感じているのです。

一度はサラリーマンとして働いていたのですが、業界で活躍する人たちの年齢が高くなっていくのを見て、今ここで私がやらないと、と思いました。サラリーマンなら私に代わる人がたくさんいるけれど、この業界には私が行くしかない。そんな気持ちでした。一度きりの人生だし、一本に絞ってやってみようね。

瀧田さんは、盆踊りを様々な

ものと同様に、必然的にクオリ

ティにも影響が出てしまっています。便利なレコードがある時代になり、天候に左右されてしまう三味線が遠ざけられてしまったり、大衆文化である盆踊りが民衆から遠くなってしまったり、文化のクオリティを保つていくためにも、興味を持ってくれる人や踊り手を増やしていく工夫が欠かせないんです。そのためにいるいると活動しているうちに、メディアに出るようになったりコラボレーションの機会も増えて、活動の幅も広がりました。これから、中野でお祭りを続け、街を盛り上げていくためにも、地域の方々の手を借りながら伝統文化を発信し続けたいと思っています。

伝統文化を継承していくために、どんどん新しいことにチャレンジする瀧田さんのエネルギーを感じ、私も現状に満足しているだけではないと感じました。ありがとうございます。



「昔のままの伝統を伝えられる人たくさんいると思いますから、斬新なことをできる私たちが、伝え方を工夫していきたいんです。」

中野で治療院を開業して20年。紆余曲折を経て、中野に辿り着いた太田さんにお話を聞きました。

太 田治療院は鍼灸や指圧マッサージを行う整体治療院です。お客様は紹介制で、太田さんの腕を求めて遠方から来られる方も多いそう。

日本に来られたのはいつ頃でしょうか。

ー 20歳を過ぎてからですね。来た当初、日本語は全く話せませんでした。私の父親はもともと日本人ですが、戦争のときに中国に残され私は中国で育てられました。1985年に法務省と厚生労働省の人が急に来て、許可が出るから日本に来ないかと言われたのです。私は行きたくありませんでした。失敗したらどうするのかと不安もありました。しかし失敗したら中国に帰ってくればいいと言われ、日本に来ることになりました。

太田さんは日本の学校に通われていたとお聞きしたので

ー そうですね。私は目が悪いという特殊な事情があって、中国では高校へ行っていないのです。日本で学校に通いたかった

ので、東京都の教育委員会や厚生労働省、文部科学省へと話をしに行きました。何度も何度も話し合いを重ねて、特別支援学校を1つ紹介してもらいました。そして中学校2年生から編入しました。2年間で言葉はできるようになりましたね。その後、高等学校に進学。そして専門学校に通いました。専門学校の入学試験もすごく大変でしたね。なぜそんなに学校に入りたいかということ、はり師の国家資格を取りたかったからです。高卒の資格がないと取れないですから。専門学校を卒業して免許を取り、5〜6年働いた後に開業しました。

大変なご経験をなさったんですね。長年日本で暮らしてき

て、多様性についてどうお考えでしょうか。

ー こういう少子高齢化の時代だから、外国人の力が必要になってくると思います。うちも最近はお客さんに外国人が増えてきたので英語を勉強しています。針師専用の英会話本があるんですよ。お客さんは英語圏の人が結構多いですね。

中野に多様性はあると思いますか。

ー もっと多様性があったほうがいいと思います。海外に比べたら外国人は本当に少ないですね。
中野の改善点を教えてください。

ー 僕は外国人と日本人、両方の立場の経験をしてきました。中野に不便なところはかなり多いと感じています。例えば、役所に行っても多言語の説明が少ないですね。英語の説明も少な

いです。区役所に通訳の方がいると良いと思います。旅行案内はあっても日本に住んでいる外国人のためのサービスが少ないんですよね。一番困っているのは健康相談ですね。私が日本に来た頃は怖くて病院に行きたくありませんでした。日本語が話せず、やり取りができないからです。今ではそういう理由で一緒に病院に行ってしまう理由が頼まれますね。特に健康や税金に関して、聞きたくても聞けないことがあるんです。ずっと日本に住んでいると子供の入学や就職、助けが必要なことはいくらもあってのにはサービスがない

ですよね。部屋を借りるのにも当に大変でした。昔は外国人とただで部屋を貸してくれたのがあったですから。日本に来た頃は日本語が話せなかったため、相談する場所もなかったですね。

太田さんにとって中野はどんな街でしょうか。

ー ここで20年働いているので『第一の故郷』ですね。新宿や池袋にも店を出したのですが、やっぱり中野が一番いいと思って戻ってきたんです。

日本社会で生きるため、自ら道を切り開いてきた太田さんの言葉に重みを感じました。



Profile

太田岐一郎さん
(中国出身)
太田治療院 院長

ここで20年働いているので『第二の故郷』ですね。



Profile

中村信子さん
人形劇俳優・美術家
エカイエ共同オーナー
「なかの育フェス」プロデューサー

地域・子ども・文化をテーマに区民が
一からつくるお祭り「なかの育フェス」。
プロデューサーの一人である
中村さんに聞きました。

中

村さんは、共同経営のカーフェ「ひと★いきカフェ・エカイエ」のオーナーであり、なかの育フェスプロデューサーの一人でもあります。地域・子ども・文化をテーマに活動を広げている中村さんは、どのようにして現在に至ったのでしょうか。

地域や子どもをテーマに活動を始めたのは、どのようなきっかけからだったのですか？
― もともと、所属していた人形劇団の事務所が中野にあった

ことからここに住むようになり、結婚し、子どもが生まれて育てた事で地域との関わりが強くなったという背景があります。子育ての中で仲間ができて、中野区内のイベントに参加したり、NPO 法人地域学習協会（放課後子ども教室として、「子どもの居場所づくり」を実施）を設立することから始めていきましたね。なかの育フェスを始めた一番の理由は、長年この地域にあった「中野まつり」がなくなってしまったことです。このお祭りは、区民が主体となって、行政と共に創り上げていたもので、他のイベントとは一味違っていました。その後、「スマイル福祉まつり」の運営に携わったりしながら、地域の住民が主体的に関われるお祭りの形を模索していました。その頃震災が起き、年に一度のお祭りであっても、地域のつながりや結びつきにつながるのだと実感したので覚えています。そして、自分のライフワークにつながる「子ども」に関連したイベントを区民主体で創りたいという想いに、賛同してくれた

カフェの仲間やなかのZEROの方のおかげもあり、今のなかの育フェスができたのです。まずは6年続けてみようと言っていた始めたこのお祭りは、次回で6回目になるんですよ。
「自分たちでつくる」という部分を大切にされているんですね。
― そうなんです。区が主体でつくったものだからといって面白くないわけではありませんが、何より自分たちが主体的に関わって、実感しながらお祭りを創っていくことが大切だと思っっているんです。大変なことも多いけれど、親が子どもに戻って楽しい企画を考えるのも、面白いんですよ。企画から装飾まで、手作り感があるイベントなので、温もりも感じられますしね。

いように工夫して、自分たちで遊びをつくる余白も残してあります。「あそび村」というエリアをつくり、子どもたちはその村でお仕事をしてコインをもらい、遊ぶことができるのです。そうやって子どもたちが主体的に楽しんでいる姿を見るのは、意外と親でさえ珍しいことなんです。子どもが心から楽しんでいる姿を大人が見られる街にしたいという、そういう願いも込めています。しかも当事者だけでなく、この中野で子育てに直接かかわっていない若い人やお年寄り、街を構成するさまざまな人と共有したいのです。

区民が主体になってやるということは、皆さん経験がない方も一緒に創っていくということですよ。どんな工夫をしながら進めてきたのですか？
― 本当に、これまでたくさん

の失敗を重ねてきました。5回やってきた育フェスも、毎回

子どもが心から楽しんでいる姿を大人が見られる街にしたいという、
そういう願いも込めています。



明治大学から中野を見守ってきたサラさんに お話を聞きました。

試行錯誤の連続でした。でも、お祭りをつくりあげていくまでの過程に意味があると思っています。その過程に失敗や成功はなくて、どんなことも反省にして活かしていければいいのです。ここまで続ける中で、メンバーやそれぞれの想い、求められること、参加者のライフステージなど大きく変わってきているので、あまり縛りは有りません。それがワクワクでもあり、なんでも実験してみる事ができる可能性がります。常にいろんな世代や立場の人と、同じ土俵で試してみても、また考えという「場」を創っているのです。

また、私がオーナーの一人として関わっているこのカフェ・エカイエもそうですが、運営していくメンバーの間に緩やかなつながりがあることは確かです。それぞれの関わり方で、自分ができることまず楽しんでやっていく姿勢があると思えますね。学生の皆さんも、子どもや地域・文化をテーマに何かやりたいことがあれば、一緒にやってみましょう！



サ ラさんは明治大学国際日本学部でアメリカと日本のポップカルチャーを扱う授業や英語の授業を担当しています。

いつから明治大学にいらっしゃるのですか。

2010年から明治で教えています。今は飯田橋に住んでいて、吉祥寺に9年間、阿佐ヶ

谷に4年間住んでいたことがあります。総武線や中央線沿線に住むことが多いですね。

働く場所として明治大学国際日本学部を選んだのはなぜですか。

ポップカルチャーや漫画が好きなので、私にとっても良い環境だと思いました。中野は便利だし、働くのに良い場所です。学生たちの英語のレベルが毎年上がってきているのを感じますね。

初めに日本に来たのはいつ頃でしょうか。

初めて来たのは1990年です。語学教師として来日しました。姉が日本に数年住んでいたで、日本についてはある程度知識もありました。アメリカに一度帰りましたが、また日本に戻ってきたと思います。そして1992年に戻ってきました。2004年まで日本で過ごしました。またアメリカへ帰っ

て、大学院を卒業して日本に再び戻ってきたのが2010年ですね。90年代後半〜2000年代には、アニメ・ジャーナリストとして働いていました。プロダクションGに行ったこともあります。とても楽しい仕事でした。

日本の漫画やポップカルチャーはお好きですか。

日本の漫画は好きですね。素晴らしいと思います。90年代の「カウボーイビバップ」という漫画が特に好きでした。中野のまんだらけに行ったことも行っただけがあつて、友達がいるといつも連れていけますね。とても面白いし、魅力的です。インターネットができる前、アメリカでは「同人誌」は主流ではなかったと思うんです。みんなそつという類のものを認識していなかったと思います。それに比べて日本ではとてもオープンでした。

中野に多様性はあると思いますか。

カレッジタウンですよ。吉祥寺や高円寺、阿佐ヶ



Profile

Ellis Sara さん
(アメリカ出身)
明治大学国際日本学部
特任講師

谷と比べると、この地域はとて多様性に富んでいると感じます。外国人がやっているレストランもよく見ますし。また、吉祥寺と同じように

Gentrificationの問題が起きる可能性が中野にもあると思います。Gentrification

というのは再開発などで、都市に比較的豊かな人達が移り住むことです。それまでとは地域住民の構成が変わってしまします。私が吉祥寺に住んでいた時は今よりもっと安く暮らしていました。だから多様性に富んでいたし、ビジネスにもリスクを背負うことができていたのだと思います。それが今中野で起きているかどうか私にはわかりませんが、極端なGentrificationが起きると、将来的に多様性は逆の方向へ向かう問題を引き起こす可能性があると思います。

最後に、中野を一言で表してください。

— みんなのために何かがある街ですね！音楽、漫画、レス

トラン、親子のための場所など様々なひとのために様々なものがあります！おすすめのお店は「玄」という定食屋さんです。

明治大学の学生は素直でいい子たちばかりとお話しかったです。ありがとうございます！

Nakano は A town with something for everybody !

Episode* 36



LGBTs*かつ精神疾患を抱える人たちの居場所をつくる、カラフル@は一と。一人の人として、私ができることを教えていただきました。

Profile

齋藤恵文さん（共同代表）
翁長裕太さん
LGBTsメンタルヘルスサポート・カラフル@は一と

* LGBTとは

中

野地域を中心に活動されている、LGBTsメンタルヘルスサポートの団体・カラフル@は一とと齋藤さんと翁長さん。どんな活動をしているのか、聞いてみました。

皆さんは、どんな方々が集まって活動されているのですか？

— 翁長さん 私たちのグループは、LGBTの当事者で、かつ精神疾患、発達障害、依存症をかかえている方々のためのものです。どうしてこのグループが出来たかと言うと、私たちがLGBTのコミュニティに足を運んだときに、自分自身が精神疾患を抱えていることを話づらいという現状があります。逆に、精神疾患を抱えている人達のグループに行ったりすると、そこはLGBTの人はいないという前提があったりするのです。私は双極性障害なのですが、双極性障害の話は、どちらのコミュニティでもあまり噛み合いません。正直に言う、どちらのコミュニティでも自分らしくいられないんです。それまで、疾患のことを言

おうと思ったとき人とどうまくコミュニケーションをとれなくて、理由の一つは自分の気持ちをよくうまく話せなくてぎくしゃくしてしまい、友達が出来ないということだと思いました。なので、「カラフル@はーと」はホッとする場所であり、自分の居場所という意味でもすごく大切な場所です。

ミーティングの中では、最初にグループのルールの読み合わせをして、一人一人に自己紹介をしてもらいます。その場所では呼ばれたい名前と、自分のセクシュアリティと可能な範囲で開示できる疾患名を言ってもらっています。そうやってまずは安心して話をできる場を作ります。皆さんからその日話したいテーマを教えてください、多かったです。

会のルールというのは、どのようなものがあるのですか？

— 斎藤さん ミーティングで出したことを、外で喋ったりSNSに書き込まない。他の発言者の言うことは否定しない。というのが基本です。私たちのグループは、他の自動グ

相手は自分ではないので、考え方は違って当たり前で、違いがあるのを前提にまず話してみる。その様な姿勢で聞いたり話したりして欲しいと思っています。

ループと少し違って「言いつばなし、聞きつばなし。」ではなく対話があります。対話をつくることで、発話者本人が気づかないヒントが得られたり、元気づけられたり、勇気づけられたり、かっこよく言うとかエンパワメントされたりっていうところがあるのです。なかには孤立してしまっている方もいるので、対話することで自分は一人で生きているんじゃないんだなっていうのを実感できるという良い点があります。日常の中で人との関わりが稀薄で、ミーティングに参加することで人との繋がりを感じられる方もいると思います。

— 翁長さん 相手は自分ではないので、考え方が違って当たり前で、違いがあるのを前提にまず話してみる。その様な姿勢で聞いたり話したりして欲しいと思っています。「私もそういうのある」ということもあるし、

「それちょっと違うな」ということもあるし。対話の中でそれが成長していくというのが自然に生まれたらいいなと思っています。

みなさんの活動がもつとしやすいくなるために私が出来ることがありますか？

— 斎藤さん まずは知ってほしいと思います。LGBTという単語は知っていても、それぞれの頭文字が何かを知らない人は多いです。それとL・G・B・Tだけではなく性自認や性的指向の人もいて、Xジェンダー、クエスチョニング、Aセクシュアル、パンセクシュアルなど多様な性の在り方が存在します。またLGBTは趣味嗜好の問題だととらえられることがすごく多いのですが、子供の頃から自覚する人も多く、趣味嗜好の問題ではなくアイデンティティの問題なんです。

— 翁長さん 最近はやりたいこれらに対する啓発が進んでいて、NHKなどでも取り上げられています。でも実際に聞くと、「私の周りにはLGBTの人はいないです」と言う人がいるんですね。でもそれはいいのではないかと、当事者が言ったらなんて思われるかが怖くて言えていないだけなんです。いないんじゃないかなって思えない。数字的な話ですが、国内でもLGBTの人は人口の7.6%いると言われていて、それはAB型の人とか左利きの人とかとほぼ同じ割合なんです。だから教室にも会社にもいます。見た目では分からなくてもそういう人はいるんです。

— 翁長さん 最近はやりたいこれらに対する啓発が進んでいて、NHKなどでも取り上げられています。でも実際に聞くと、「私の周りにはLGBTの人はいないです」と言う人がいるんですね。でもそれはいいのではないかと、当事者が言ったらなんて思われるかが怖くて言えていないだけなんです。いないんじゃないかなって思えない。数字的な話ですが、国内でもLGBTの人は人口の7.6%いると言われていて、それはAB型の人とか左利きの人とかとほぼ同じ割合なんです。だから教室にも会社にもいます。見た目では分からなくてもそういう人はいるんです。

— 翁長さん 最近はやりたいこれらに対する啓発が進んでいて、NHKなどでも取り上げられています。でも実際に聞くと、「私の周りにはLGBTの人はいないです」と言う人がいるんですね。でもそれはいいのではないかと、当事者が言ったらなんて思われるかが怖くて言えていないだけなんです。いないんじゃないかなって思えない。数字的な話ですが、国内でもLGBTの人は人口の7.6%いると言われていて、それはAB型の人とか左利きの人とかとほぼ同じ割合なんです。だから教室にも会社にもいます。見た目では分からなくてもそういう人はいるんです。



Profile

ラヤパン・アマダスさん
南インドダイニング 店長
(<http://www.minami-indodining.com/>)



気さくなオーナーの 心意気を感じられる料理店 南インドダイニング。

「お客様とのコミュニケーションを大事にされていて、必ずお話しするように心がけています。」

※マサラ→粒のままの香辛料や粉にひいたものを、複雑に混ぜ合わせたものの総称

南

インドダイニングは薬師あいロード商店街にあり、南インド料理店です。

「いつ頃来日されたのでしょうか。」

「1992年です。日本のインド料理のお店で働いていました。それから2005年までいるんですけど、中野の鷲宮に4年間住んだ後、東久留米に行きました。そして埼玉の新座、群馬の高崎などで働きました。インドでは元々ホテルの料理人をしていました。日本には仕事のために初めて来ました。鷲宮で働いていた時の知り合いの紹介で今のこの場所に行きました。この店は2005年からやっています。店名の候補はたくさんありましたが、南インド料理を提供したい！という強い思いがあったのでこの店名にしました。これまで日本では北インド料理でしか働いて来なかったんですよ。」

「どんなお客様が多いですか。」

「うちのお客様は外国人と日

本人が半分ずつですね。色んな国の人が来ますよ。野菜をメインに使っている料理もあるから、ベジタリアンの人も食べられます。お客様がどの出身でも提供する料理は同じですが、辛さの調節ができます。お子様メニューもあるんですよ。あとはチャイのパフォーマンスも名物の一つですね。

「またお客様とのコミュニケーションを大事にされていて、必ずお話しするように心がけています。オーダーのときに話しかけることが多いですかね。社会人の方だったら仕事のこと、学生の方だったらこの大学とかね。中野に大学が出来てからは、うちにもたまに大学生が来るようになりましたね。明治大学の台湾と韓国の男子学生も来ますね。中国の女の子たちも3、4人で来てくれます。メニューが豊富で様々な種類のマサラ*がありますね。」

「うちのマサラは全てお客様さんのオーダーが入って作っているんです。それが大変なので南インド料理は誰もやらないんですよ。インド料理屋さんは

よくありますし、スリランカ、パキスタン、ネパールの料理屋さんもみんな似ていますね。一般の店はカレールウを使うのですが、それは比較的簡単です。うちは頼まれてから作る分、提供するまでに少し時間がかかります。野菜をたくさん使っているので、作り置きしちゃうと傷んでしまうんです。野菜が柔らかくなりすぎるとベーストみたいなになってしまいますから。注文されてからマサラを作られているとは驚きです！」

「インド料理の中でも北と南は味が違うんです。南インド出身の従業員が増えてから提供するメニューが増えました。メニューは4回くらい変えています。」

「中野の街はどんな街ですか。」

「13年前と大きく変わりましたね。若い人が増えましたし、駅も以前より混んでいますよね。お祭りにいつも参加してお神輿を担いでいますよ！中野で南インド料理を提供したいというオーナーの熱い思いを感じました。ありがとうございます。」

長年日本に住む カナダ出身のKateさんに お話を聞きました



Profile

Kate Nielsen さん
(カナダ出身)
会社員



です。ポケットスクエアといった4つの劇場があって、そこでよく公演を行っています。お客さんも来やすい良い場所だと思いますね。

お仕事を何をしているのでしょうか。

今は翻訳の会社で働いています。あとはたまに英語を教えることもありますね。舞台のほうは仕事ともいえるけど、ボランティアみたいなものかな。

中野の多様性についてどうお考えですか。

いろんな仕事をしている人がいると思いますね。建設業の現場で働く人もいれば、アーティスト、お金持ちの人など。そういう点から見て多様性があると言えるのではないのでしょうか。

これまで日本で暮らしてきて困ったことはありますか。

最初はもちろん言葉がわかりませんでした。理解するのに時間がかかりましたね。あとは良い意味でも悪い意味でも、欧

『ダイナミックな街』ですね。

いつも何かが起きていて動いている思っています。

米出身の外国人はアジア系の外国人と違う扱いを受けると思います。欧米からの外国人はアジア人より日本語が下手な場合が多いと思うんです。それで欧米人がただ一言「こんにちは。」と言っただけで、「日本語上手ですね!」と大げさに言われてしまうんです。もし中国人や韓国の人などのアジア系の人が日本語を話さなかったら、違う扱いを受けると思います。どこから来ると、どんな外見かによって対応が変わると思いますね。

私のフランス人の友人は日本でいつも英語で話しかけられると言っていました。日本語で返答しても英語で話しかけられるとのことでした。

私もそれはよくありますね。ここは日本なので日本語を話すべきだと思っんです。でも誰も日本語で話してくれなかったら、上達させるのは難しいですよ。もし頑張って日本語で話しかけたのに、英語で返答されてしまったら悲しいと思いませんか。ヨーロッパ出身で英語が母語でない人達から、日本でいつも英語で話しかけられるという話をよく聞きます。白人は英語だと思われているんですね。

あとは東京では少ないかもしれませんが、外国人は日本語が話せないと思われて、おかしな日本語で話しかけられることがあります。それを話している人は分かりやすい日本語だと思っているのですが、こちらからすると普通の日本語より理解するのが難しいです。外国人側は日本語が学べず上達の機会を失いますし、話も理解できません。これは一種の悪循環になっていると思います。個人的には普通の日本語を話してもらえたら嬉しいですね。

最後に、中野を一言で表すとしてはいかがでしょうか。

『ダイナミック』ですね。いつも何かが起きていて動いている街だと思えます。古い部分も変化していく部分もあって面白いですね。

Kateさん、ありがとうございました!

中

野を中心に様々な活動をされているKateさん。その活動の1つは中野で多くの公演を行う英語の劇団です。

中野に来た経緯を教えてください。

都心に近いからです。中野に来る前は都心からは少し離れた西東京に住んでいたんです。電車は西武池袋線しか通っていませんでした。2011年に東日本大震災が起きた時、その電車が止まってしまったところにも行けなくなってしまいました。その時にもう少し便利な場

所に住もうと思ったんです。日本には2000年に来ました。最初は仙台で暮らしていました。

JETプログラムで、中学校と高校とたまに小学校で英語を教えていましたね。東京に移ってきたのは8年前です。最初は法律事務所働いていました。あとは大人に英語を教えることもありましたが、舞台の監督をされていると伺いました。

私が一緒に働いている英語の劇団は中野で多くの公演を行っています。中野駅南口に劇場がたくさんある通りがあるん

「中野のまち全体をキャンパスだと思って。」 賑わう中野をつくってきた観光協会の宮島さんの、 学生への想いを聞きました。

中野のまちのこれまでとこ
れからを考え行動してこ
られた宮島さん。そもそも、ど
のような経緯で中野区観光協会
は作られたのでしょうか。

「ビジネスマンと学生が再開
発の影響でまちに来るようにな
った時、このま何も地域の
魅力発信をしていかなければ、
中野ではなく新宿などに行っ
てしまつてはないか?という危
機感を覚えました。その気づき
から、東京都のアドバイザー制
度を活用して一年間の勉強会を
やり、その後民間で観光協会を
立ち上げようということになり
ました。会社経営と別に地域に
関わり始めた時期は、35歳くら
いの時です。そこから、まちの
経済界にあるコミュニティの中
に参加するようになり、地域の
ことをどんどん知り、人々と
関わりを持つようになりまし

た。その経緯があつて、協会設
立時には多くの方々に協力して
頂きました。

中野に生まれたルートがある
ということもなく、本業と違つ
たボランティアの活動で地域に
貢献されている宮島さん。その
モチベーションはどこから来て
いるのでしょうか?

「何なんでしょうね笑。この
役目を引き受けたからには、き
ちんとやり遂げないと、という
責任感はもちろんあります。か
なり時間と労力を費やすのは
確かだし、僕自身の場合は誰が継
いでゆくのだろうという悩みも
ありますよ。僕だけに限らず、
ボランティアで一緒にやつてい
る仲間みんな、自分の仕事があ
つて100%のコミットはで
きません。でも、できるところ
や興味のあるところは楽しんで
一生懸命やっています。その雰

囲気がいいんじゃないですか
ね。時間はつくるものですから
ね。誰だつて、好きなことだつ
たら時間をつくつてもやりま
せんか?興味のあることをそれ
それがやつてゆく、すると活動
が多岐に渡つてきて面白い。そ
ういふ部分が僕自身のモチベ
ーションになっているんだと思
います。

なるほど。温かく、良い意味
でゆるい関係があることも中野
の秘密なのです。宮島さんは、
中野の未来についてどんなこと
をお考えですか?どんなまちに
していきたいですか?

「そんな大それたことは考え
てないですよ笑。今は、「昭和
新道」や「ふれあいロード」の
賑わいを核にして、どのように
して中野区全域にその賑わいを
広げていけるかをみんなで考え
ています。そこに、ぜひ学生を

んたちも積極的に関わってほ
しいと思っています。

学生との関わりも多い宮島さ
んですが、学生に伝えたいこと
はどんなことですか?

「「アンテナストーリー」や
「にぎわいフェスタ」を通して、
少しずつ学生がイベントのボラ
ンティアに来てくれるようにな
り、つながりの形が出来てきた
と思います。イベント運営サー
クルもできて、嬉しいですよ。
でも、もつたれないと思うのは、
だいたい3年生の時から活動に
入ってくるので、実質活動でき
るのは本当に少しの時間になつ

てしまうという部分です。地域
で活動していくというのは時間
がかかることなので、なかなか
1年では難しいところもありま
すよね。さらに言うとうと、せつ
か1つの代で作つた繋がりが、
次の代になるとゼロになってし
まうことがもつたれないです。
学生同士の先輩から後輩へ縦の
繋がりが薄いと感じます。中野
のまちの人たちと関わって、「こ
こに関しては誰々に聞く」とい
う風なことをできたら、学びも
変わってくると思いますよ。

確かに、地域の方達との信頼
関係は、じっくりと時間をかけ



Profile

宮島茂明さん
宮島物産株式会社
代表取締役社長
中野区観光協会・理事長

ていく必要がありますよね。

— 今の願いは、「まちバル」などのイベントの運営母体に学生がいることです。ポランティアではなくて、運営する真ん中においてほしいと思っています。例えば、アンテナストリートを学生が全て主体で回すとか。そうしたらいつも新しい風が吹いて、地域との融合があるワクワクするイベントが生まれるのではないかと期待しています。失敗するかもしれないけれど、継続してもらいたいなど。どうしてそこまでしてほしいかというと、中世の町は塀の中が全てキャンパスだったらしいです。学校の建物だけがキャンパスではなくて、街の全体がキャンパスだったと。じゃあ、中野もそれでいいじゃないですか。今の中野キャンパスは小さいけれど、じゃあ地域が受け入れるよ、という風に。絶対、和泉キャンパスじゃできない経験が中野ならではの時間かけられるので、まちとの関わりや人との関わりのチャンスをつかんで、まちに出てきてください。自分の地元ではできなくても明治大学生としてなら、地域と関わるきっかけをつくることができると思いますよ。

1日のイベントやポランティア活動で、地域貢献。だと思っ
てしまいがちな学生ですが、(も
ちろんそれも素晴らしいけれ
ど)、ゆっくりと時間をかけて
地域の方達と人間関係を育んで
ゆくことができれば、もっと
もっと学びが深くなるのではと
思いました。宮島さん、ありが
とございました。

『学生がイベントの中心にいることで、いつも新しい風が吹いて、地域との融合があるワクワクするイベントが生まれると思う。失敗するかもしれないけど、そういうのを継続してもらいたいな』と思っ。

Episode* 40

海外送金サービスなどの事業を通じて
多文化共生を支援するセブン銀行。
想いを引き継ぐためのヒントを伺いました。



右から松橋さん、山田さん

Profile

松橋さん
山田さん
セブン銀行

山 脇ゼミとして関わらせて
いただいているセブン銀
行さん。海外送金サービスとい
う、日本から海外へいつでもど
こでも簡単に送金ができるサー
ビスを提供しています。そんな
セブン銀行のATMを開発し
た松橋さん、今海外送金サービ
スを引っ張っている山田さん
に、お話を聞いてきました。

セブン銀行さんの外国人就労
者を支援する事業や取り組み
は、日本でも先進的なものだ
と思います。どうやってここまで
継続されてきたのですか？

— 松橋さん 一番大切だと言
えるのは、「共感を生み出すこ
と」でしょう。持続的なプログ

ラムをつくるためには、共感者を育てることができるかどうかキーになります。どんなに強い想いで始めたものでも、その後熱意持って続けていく人がいなければ終わってしまいますからね。そのため、小さくても強いネットワークをつくり後輩に引き継いでいくことや、イベントなどで想いを伝える機会を持つことなど、あの手この手でやっていくことが必要ですね。

私たちのサービスマも、日本で暮らす外国人の人たちにとって住みやすい暮らしをつくる手助けをしたい、していきたいという想いへの共感から始まっています。本事業を持続することこそ、まさに本業を通じた社会貢献だと思っています。私たちのやってきたことも、明治大学のみなさんと想いは同じだと思っていますよ。

そんな想いから生まれたサービスマだったんですね。「多文化共生」ということについて、山田さんはどうお考えですか？

山田さん 私は、実際に外国人の方々が多く住んでいる地

区に行き、外国人のお客さまと直接お話する営業も実施していますが、お話を聞くと日本でも暮らすことの不便さを思い知ります。私たちの海外送金サービスを知って、母国にいる大切な家族にすぐ送金できることを喜んでくれる一方で、手続きの仕方や申請など外国の方には難しい部分が多いという意見をもらい、金融サービスを通じてできる範囲で手助けをしています。

そのような場面で考えるのが、「彼らは、何を本当に必要としているのだろうか？」ということ。それは情報ではないのは、と思うのです。情報を、人とのコミュニケーションを通じて知ること。それが一番彼らにとって必要なことなんじゃないかと感じています。銀行のサービスからは少し離れるかもしれませんが、どのようにしたら彼らにとって暮らしやすい社会になるのか、考えています。たしかに、本当に必要なのは、そばにいて助けてあげられる存在なのかもしれませんね。

山田さん そういう意味で

も、学生が街に拠点を持つのはどうですか？中野の街と協力して、空き家や空き店舗を使って学生が継続的にいる場をつくるのです。中野にいる方々の、本当の想いをすることもできると思いますよ。その場に訪れる方々と触れ合い、話をする中で、本当にどうにかしたい課題も見えてくると思います。そうすれば、自然と行動に移す学生も増えてくるかもしれないですね。松橋さんからもありますが、実体験こそが一番の共感

につながります。場をつくることで、多様性を知り、外国人という枠だけにとまらない、広い意味での多文化共生につながるのではないのでしょうか。大学、まち、区のみんなを巻き込んだ場づくりができれば、きっと素敵だと思いますよ。

会社として、継続して多文化共生に取り組んでいるセブン銀行さんのお話、とても貴重でした。ありがとうございました。

「情報も、人とのコミュニケーションを通じて知ること。それが一番彼らにとって必要なことなのではないかと感じています。」



世代間での多文化共生も、 まずは必要となる。日本が抱える 問題に立ち向かえるよう、 鍛えなければいけない力は 何なのか、赤星さんに聞きました。



Profile

赤星義彰さん
有限会社 B.I.S デザイン
研究所
代表取締役

中

野区で20年以上まちづくりやイベントなどを支えてきた赤星さん。お話しするうちに、赤星さんの考える本当の意味での多文化共生や、これからの世代が身につけていかなければいけない力がわかってきました。

まずは中野についてどんな視点をお持ちなのか伺いました。

中野のまちには、流動性があると思います。一日の中で見ても、人の出入りが激しいまちですし、人口ピラミッドを見ても学生が入ってきたり逆にファミリー層が出て行ったりと、変化が多いまちですね。その分、多文化共生という見方であろうと多様なかもしれないですね。でも、私からすると「日本人と外国人」が共生することが多文化共生だとは一概に言えないと思います。そもそも、私は外国人とのコミュニケーションより若い人達とのコミュニケーションの方が大変だと感じますからね。言葉の壁こそないものの、育ってきた環境や時代が大きく違うので、理解し合うのが難しいと思っています。でも、

この世代間の違いを乗り越えることこそ、多文化共生社会をつくる第一歩になるのではないですか？

確かに、同じ日本人の中でも様々な価値観がありますよね。世代間でもっと理解を進めいくためにはという点でもそうですし、学生が多文化共生のまちに向けられることは何なのでしょうか。

想像力を高める、ということころだと思えますよ。特に必要なのは、様々な視点で考える想像力と、長期的な目線で未来を見る想像力です。この先、私たちの周りの環境はどうなっていく、それに対してどのような人が何を考えるのか、これをわかるようになるためには、想像力が必要です。また、社会問題を抱えるこの国で動いていくのなら、もっと先を想像して今やるべきことをやっていく必要があると思いますよ。

今私が一番懸念している社会問題は、少子高齢化問題です。これは、もっともっと危機感を抱いて解決に向けて動いていかなければならない問題ですよ。

子育てしやすく、仕事もしやすい環境をつくっていくことは、皆さんの生活に密着していることですから、政治的な部分にも興味を持って、意識を高めていってほしいと思います。

一つ一つの社会問題に対して様々な人が関わっているのです、それぞれの視点に立つて意見を拾い、融合させていく人材がこれから必要になっていきます。言ってしまうえば、動いている業界が違えば立場も大きく変わります。そういう部分でも多様性というのはあって、その中でどう物事をうまく進めていくことができるかが課題なのです。

人種や国籍などの多様性より、もっと足元に大きな多様性が広がっているんですね。それらを理解するためにも想像力を鍛えるべきということだと思のですが、赤星さんは学生のころどんなことをしていらしたのですか？

若い時はとにかく遊んでましたよ笑。でも、今の時代と違うのは、多世代の人たちや文化の違う人たちとよく遊んでいたことです。バックパックで旅を

して、きつと普通じや出会わな
いような人と出会ったり、飲み
屋さんで何世代も上の人と飲ん
だりと、様々な人たちと関わっ
て遊んでいました。今は、飲食
店にしても何にしても、若い世
代が集まるどころ、上の世代
が集まるどころは全然違います
よね。そういう部分でも、一歩
いつもと違うところに行ってい
るなどしてみると変わると思
います。多文化や多様性という
のは、実際に経験して触れ合
わないと理解できないですから
ね。どんどん前に出ていくこと
が大切だと思いますよ。

特に必要なのは、
様々な視点で考える想像力と、
長期的な目線で未来を見る
想像力です。

最後にバトンが渡ったのは、
YouthCreate の原田さん。
学生が一步踏み出せるきっかけは、
どのようにして創られるのでしょうか。



Profile

原田謙介さん
YouthCreate・代表
グリーンバード
中野チームリーダー

YouthCreate
の原田さんとは、4年
間を通じて何度か一緒にイベン
トなどをやらせていただいき
ましたが、中野に焦点を当てた
お話を聞くのは初めてでした。
どんな経緯でYouthC
reateを中野で始めたの
でしょうか？

ー 本当に単純なきっかけ
だったんですが、事務所を構
えるのに良い物件に巡り会
えたのが中野だったんです。私
は大学を卒業してすぐに、
YouthCreateとい
う若者と政治をつなぐ活動をす
るNPO団体を立ち上げまし

た。大学在学時から、若者の政
治への関心を高めるための活動
をしてきましたが、日本には学
生の組織以外にそのような活動
をする団体が基本的になかった
ので、自ら立ち上げました。も
ちろん、始めは仕事という仕事
もないので、事務所を別に借り
るわけにもいかず、立ち上げた
メンバーと一緒にルームシェア
をしたいと思います、場所を探し
ていました。都心から遠すぎない
ところで探していたら、ちょ
うど中野に良い物件を見つけたの
で、中野に来たんですね。

ー その物件で数人とルーム
シェアをしていて、メンバー
の一人が「Hidamari
café（ひだまりカフェ）」
という学生が「社会で何かした
い」という想いを表現出来る手
作りのカフェを運営していまし
た。そこから、区役所の酒井さ
んや中野に住んでいる様々な方
と接点を持つようになりました
ね。「ひだまりカフェ」はすで
に閉店してしまっていますが、
学生が地域の人と関わる場所と
しておもしろかったと思いま
す。

ー そんな場所があったのです
ね。行ってみたかったです。原
田さんはグリーンバード中野
チームのリーダーとしても中野
で活動されていますよね。
ー そうですね。引越してき
て中野の方達と接したり、大学
ができて変わってゆく中野の街
を見て、私も何かやりたいと思
いました。グリーンバード全体
のリーダーと知り合いでそんな
話をしていたら、中野で始め
ちゃいなよ！と早速OKをも
らえて、始めました。堅苦しい
雰囲気じゃなく街の人と話がで
きるの、やってみるとおもしろ
いんですよ。

いくことの方がやりがいや達成感を得られるかもしれません。そういうことの過程や成果ももちろん大切ですが、継続して関われる場というものは、学びにつながると思えますね。

確かに、私たちにとってはどちらも成長できる場になりそうです。これから、YouthCreateさんはどのように活動を広げてくれるのですか？

18歳まで選挙権が引き下げられたことよって、区立の中学校に選管・教育委員会と一緒に出前授業に行けるようになって、活動の幅はだいぶ広がりました。中野区の方々や議員さんにもお世話になる機会が増え、とても助かっていますね。これから、私たちの活動も中野に焦点を当てて、数年かけて「中野は若い人たちが政治に興味を持ってきているまちだ」と言ってもらえるように、戦力的にやっていきたいとも考えています。明治大学にも授業に行かせてもらおう機会があり、そこで出会った学生とグリーンボードやYouthCreateで

関わっていただけたら嬉しいです。この冊子を読んで、載っている方々の想いに共感したら、その人にコンタクトを取ってみるといいと思いますよ。みなさん、ウエルカムだと思います！

原田さん、お忙しい中ありがとうございました。

**「私たちの活動も中野に焦点を当てて、
数年かけて
『中野は若い人たちが政治に興味を
持っているまちだ』と言ってもらえるように、
戦力的にやっていきたいとも考えています。」**



編集
後記

「中野の人にインタビューをしてみたい！」そう思い立つてから3ヶ月が経ち、いま私の目に映る中野の街の景色は3ヶ月前のそれとは全く違います。

インタビューをするうち、多文化共生というテーマに留まらず、人生の助けになるような言葉や想いに出会うことができました。この冊子に綴られているのは、みなさまの想いのほんの一部だと思います。しかし、これから中野の街に関わる人がこの冊子を読み、みなさんの想いに何か熱いものを感じる、そんなきっかけになればいいと思っています。

インタビューさせて頂いた方々に、心からの感謝の気持ちを込めて、本当にありがとうございます。

森野日菜子

はじめに、『なかのわ』のインタビューに協力してくださった中野の皆様、本当にありがとうございます。今回はリレー形式でインタビューを行いました。インタビューのアポイントメントをとることに苦戦しましたが、何とか形になって嬉しいです。インタビューと題して誰かのお話を聞くことは、私にとって初めての経験でした。なぜ中野に来たのか、中野への想いなどを聞き取るうちに、人それぞれ本当に十人十色の人生があるのだと感じました。そして、街はそんな多様な人たちが一人一人が作っているのだと思いました。それはまさにゼミのテーマである多文化共生社会ですね。

私はこのインタビューを通して『中野』という街がさらに好きになりました。キャンパスが中野にあるという利点を生かして、地域の方々とつながりを持つ学生がこれからもっと増えると良いなと思います。最後になりましたが、みなさんインタビューに答えてくださったお話をぜひ訪れてみてください。こだわりのつまった美味し料理と素敵なオーナーの方々に出会うことができます！

藤橋亜寿美

発行元／明治大学 国際日本学部 山脇ゼミ

発行日／2018年3月1日

取材編集／藤橋 亜寿美 森野 日菜子

フェイスブック

<https://www.facebook.com/nakanotabunka/>

メールアドレス

yamawaki.seminar@gmail.com

Special Thanks (敬称略)

- ・師岡 咲季・土田 都・白石 彩・渡貫 綾音
- ・藤本 優花・村田 萌衣子・児島 風子・呉 汐菜・島村 幹人



たがののちん